

# マタイ傳福音書

## 第一章

一 アブラハムの子、<sup>(イ)</sup>ダビデの子、<sup>(ロ)</sup>イエス・キリストの系圖。

二 アブラハム、イサクを生み、<sup>(ホ)</sup>イサク、ヤコブを生み、ヤコブ、ユダとその兄弟らとを生み、<sup>(ニ)</sup>三

四 ユダ、タマルによりてパレスとザラとを生み、<sup>(ト)</sup>パレス、エスロンを生み、エスロン、アラムを生み、<sup>(ハ)</sup>四 アラム、ア

五 ミナダブを生み、<sup>(ニ)</sup>アミナダブ、ナアソンを生み、<sup>(ト)</sup>ナアソン、サルモンを生み、<sup>(ハ)</sup>五 サルモン、ラハブによりてボア

六 ズを生み、<sup>(ニ)</sup>ボアズ、ルツによりてオベデを生み、<sup>(ト)</sup>オベデ、エツサイを生み、<sup>(ハ)</sup>六 エツサイ、ダビデ王を生めり。

七 <sup>(イ)</sup>ダビデ、<sup>(ロ)</sup>ウリヤの妻たりし女によりてソロモンを生み、<sup>(ハ)</sup>七 ソロモン、<sup>(ニ)</sup>レハベアムを生み、<sup>(ト)</sup>レハベアム、アビ

八 ヤを生み、<sup>(イ)</sup>アビヤ、<sup>(ロ)</sup>アサを生み、<sup>(ハ)</sup>八 アサ、<sup>(ニ)</sup>ヨサバテを生み、<sup>(ト)</sup>ヨサバテ、<sup>(イ)</sup>ヨラムを生み、<sup>(ロ)</sup>ヨラム、<sup>(ハ)</sup>ウジヤを生み、<sup>(ニ)</sup>

九 <sup>(イ)</sup>ウジヤ、<sup>(ロ)</sup>ヨタムを生み、<sup>(ハ)</sup>ヨタム、<sup>(ニ)</sup>アハズを生み、<sup>(ト)</sup>アハズ、<sup>(イ)</sup>ヒゼキヤを生み、<sup>(ロ)</sup>ヒゼキヤ、<sup>(ハ)</sup>マナセを生み、<sup>(ニ)</sup>マナセ、

二 <sup>(イ)</sup>アモンを生み、<sup>(ロ)</sup>アモン、<sup>(ハ)</sup>ヨシヤを生み、<sup>(ニ)</sup>ニバビロンに移さるる頃、<sup>(ト)</sup>ヨシヤ、<sup>(イ)</sup>エコニヤとその兄弟らとを生めり。

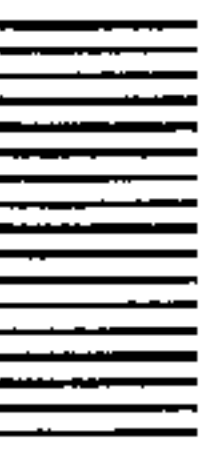
三 <sup>(イ)</sup>ニバビロンに移されて後、<sup>(ロ)</sup>エコニヤ、<sup>(ハ)</sup>サラテルを生み、<sup>(ニ)</sup>サラテル、<sup>(ト)</sup>ゾロバベルを生み、<sup>(イ)</sup>三 ゾロバベル、<sup>(ロ)</sup>アビ

四 <sup>(イ)</sup>ウデを生み、<sup>(ロ)</sup>アビウデ、<sup>(ハ)</sup>エリヤキムを生み、<sup>(ニ)</sup>エリヤキム、<sup>(ト)</sup>アゾルを生み、<sup>(イ)</sup>四 アゾル、<sup>(ロ)</sup>サドクを生み、<sup>(ハ)</sup>サドク、<sup>(ニ)</sup>ア

五 <sup>(イ)</sup>キムを生み、<sup>(ロ)</sup>アキム、<sup>(ハ)</sup>エリウデを生み、<sup>(ニ)</sup>エリウデ、<sup>(ト)</sup>エレアザルを生み、<sup>(イ)</sup>五 エレアザル、<sup>(ロ)</sup>マタンを生み、<sup>(ハ)</sup>マタン、

六 <sup>(イ)</sup>ヤコブを生み、<sup>(ロ)</sup>ヤコブ、<sup>(ハ)</sup>マリヤの夫ヨセフを生めり。<sup>(ト)</sup>此のマリヤよりキリストと稱ふるイエス生れ給へり。

イ一六 路三・三四	一・三二、六九 約七	三三	ル 母後二二・二四	五 耶二七・二〇 太
一三二 創二二・一	・四二 徒二・三〇、	ト三二六 得四・二八	テ 母後一一・二六、一	一・一七
八加三・二六 羅九	一三・二二、二三 羅	一・二二 代上二・一	二・一〇	レ 代上三・一七、一九
・五	一・三三 提後二・八	一・一五	ワ 王下一五・一 代上	ソ 路三・二七
口 母後七・二二、一六	黙二二・一六	チ 書六・二五	リ 母前二六・一、一七	三・一一、一二
詩八九・三、四、一三	ハ 太一・一八を見よ	・一二	カ 代上三・一五、一六	ツ 喇三・二
二・一一 賽九・六、	二 創二二・三	・一二	ヨ 帖二・六 耶二四、	ネ 路三・二三
七、一一、一 耶二三	ホ 創二五・二六	ヌ 七・一〇 代上三、	一、二七・二〇	
・五 太九・二七 路	ヘ 創二九・三五 路一、	一〇一 一四を見よ	タ 王下二四・二四、一	



一七 されば總て世をふる事、アブラハムよりダビデまで十四代、ダビデよりバビロンに移さるるまで十四代、バビロンに移されてよりキリストまで十四代なり。

一八 ハイエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ借にならざり

一九 しに、聖靈によりて孕り、その孕りたること顯れたり。一九 夫ヨセフは正しき人にして之を公然にするを好まず、

二〇 私に離縁せんと思ふ。二〇 斯て、これらの事を思ひ回らしをるとき、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『ダビデの子

二一 ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり。二一 かれ子を生まん、汝その名をイ

二三 エスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり』二三 すべて此の事の起りしは、預言者によりて主の云ひ

給ひし言の成就せん爲なり。曰く二三 『視よ、處女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと稱へられん』

二四 之を釋けば、神われらと偕に在すといふ意なり。二四 ヨセフ寐より起き、主の使の命ぜし如くして妻を納れたり。

二五 されど子の生るるまでは、相知る事なかりき。斯てその子をイエスと名づけたり。

### 第二章

一 イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに  
來りて言ふ、二 『ユダヤ人の王として生れ給へる者は、何處に在すか。我ら東にてその星を見れば、  
拜せんために來れり』三 ヘロデ王これを聞きて惱みまどふ、エルサレムも皆然り。四 王、民の祭司長・學者らを  
皆あつめて、キリストの何處に生るべきを問ひ質す。五 かれら言ふ『ユダヤのベツレヘムなり。それは預言者に

イ太一・一二	六七、二三・二、二	二九 徒四・一二、五	四九約二三・一八	ソ(新三五・六至上四	二、九、一二、一八	ム太一・一七を見よ
ロ太二・四、一一・二、	四二・六 約一・四	ホ路一・三五	三二 一三・三三、	マ太二・一	路一九・三八、二	ウ約七・四二
一六・一六、二三・四	一、四・二五、二六	ヘ申二四・一	三八(徒三・二六)	マ太二・一四、二六・	マ太二・一六(帖	三三・三八 約一・
二、二三・一〇、二七	ハ太一・一、一六・二二	ト太二・一三、一九	又太二・一四、二六・	カ太二・二〇を見よ	一・二三 耶一〇・七	四九一八・三三、三
二七、二二 可八・	可一・一約一・一七、	(太二・一二、二二)	ヨ(太二・二二)	ヨ(太二・二二)	但二・二二	七、一九・二二
二九 路二・二一、	一七・三 (太二・一	チ太二・二五 路一・三	約一九・三六	タ路一・五	ネ 耶三三・五、三〇・	ナ(民二四・一七 歐三
四・四一、九・二〇、	六)	一、二・二二	ル太二・一五、一七、二	レ路二・四一七、一五	九聖九・九 太二七・	二・二六)
二〇・四一、三三	二 路一・二七(太二・	リ路二・一一 約二	三、四・一四 可一四	レ路二・四一七、一五	一一、三七 可一五・	ラ太八・二を見よ

申出五・二七・二四  
 ノ母後五・二結三四  
 一三  
 一四  
 一七  
 一八  
 一九  
 二一  
 二二  
 二三  
 二四  
 二五  
 二六  
 二七  
 二八  
 二九  
 三〇  
 三一  
 三二  
 三三  
 三四  
 三五  
 三六  
 三七  
 三八  
 三九  
 四〇  
 四一  
 四二  
 四三  
 四四  
 四五  
 四六  
 四七  
 四八  
 四九  
 五〇  
 五一  
 五二  
 五三  
 五四  
 五五  
 五六  
 五七  
 五八  
 五九  
 六〇  
 六一  
 六二  
 六三  
 六四  
 六五  
 六六  
 六七  
 六八  
 六九  
 七〇  
 七一  
 七二  
 七三  
 七四  
 七五  
 七六  
 七七  
 七八  
 七九  
 八〇  
 八一  
 八二  
 八三  
 八四  
 八五  
 八六  
 八七  
 八八  
 八九  
 九〇  
 九一  
 九二  
 九三  
 九四  
 九五  
 九六  
 九七  
 九八  
 九九  
 一〇〇

六よりて、六「ユダの地ベツレヘムよ、汝はユダの長等の中にて最小き者にあらず、汝の中より一人の君いでて、わが民イスラエルを牧せん」と録されたるなり』

七ここにヘロデ密に博士たちを招きて、星の現れし時を詳細にし、八彼らをベツレヘムに遣さんとして言ふ

『往きて幼児のことを細にたづね、之にあはば我に告げよ。我も往きて拜せん』九彼ら王の言をききて往きしに、視よ、前に東にて見し星、先だちゆきて、幼児の在すところの上にと止る。一〇かれら星を見て、歡喜に溢れつ、二家に入りて、幼児のその母マリヤと偕に在すを見、平伏して拜し、かつ寶の匣をあけて、黄金・乳香・没薬など禮物を獻げたり。三斯て夢にてヘロデの許に返るなどの御告を蒙り、ほかの路より己が國に去りゆきぬ。四その去り往きしの際、視よ、主の使、夢にてヨセフに現れていふ『起きて、幼児とその母とを携へ、エジプトに逃れ、わが告ぐるまで彼處に留れ。ヘロデ幼児を索めて亡さんとするなり』五ヨセフ起きて、夜の間に幼兒とその母とを携へて、エジプトに去りゆき、六ヘロデの死ぬるまで彼處に留りぬ。これ主が預言者によりて『我エジプトより我が子を呼び出せり』と云ひ給ひし言の成就せん爲なり。七

八爰にヘロデ、博士たちに賺されたりと悟りて、甚だしく憤ほり、人を遣し、博士たちに由りて詳細にせし時を計り、ベツレヘム及び凡てその邊の地方なる二歳以下の男の兒をことごとく殺せり。九ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言は成就したり。一〇曰く、一八『聲ラマにありて聞ゆ、慟哭なり、いとどしき悲哀なり。ラケル己が子らを歎き、子等のなき故に慰めらるるを厭ふ』

一九ヘロデ死にてのち、視よ、主の使、夢にてエジプトなるヨセフに現れて言ふ、二〇「起きて、幼児とその母とを携へ、イスラエルの地にゆけ、幼児の生命を索めし者どもは死にたり」三ヨセフ起きて、幼児とその母とを携へ、イスラエルの地に到りしに、三アケラオその父ヘロデに代りて、ユダヤを治むと聞き、彼處に往くことを恐る。また夢にて御告を蒙り、ガリラヤの地方に退き、三ナザレといふ町に到りて住みたり。これは預言者たちに由りて、彼はナザレ人と呼ばれん、と云はれたる言の成就せん爲なり。

第三章

一その頃バプテスマのヨハネ來り、ユダヤの荒野にて教を宣べて言ふ、二「なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり」三これ預言者イザヤによりて、斯く云はれし人なり。曰く「荒野に呼はる者の聲す」一「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」四このヨハネは駱駝の毛織衣をまとひ、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食とせり、五爰にエルサレム及びユダヤ全國またヨルダンの邊なる全地方の人々、ヨハネの許に出できたり、六罪を言ひ表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。七ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く來るを見て、彼らに言ふ「蝗の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。ハさらば悔改に相應しき果を結べ。九汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言はんと思ふな。我なんぢらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり。一〇斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし。二我は汝らの悔改のために、

イ太二・一三 一・四五、徒一〇・四五  
 口(四四・一九) 三八等 三八等 四・五  
 八太二・二二を見よ 太二・二二を見よ 一〇・二〇・七、路 一〇・九、一・二  
 二太四・二三、二二、 四九・七、五三、 一八、路三・二一、 〇・二二・三三、  
 一一、可一・九路 二二三、可一・二四、 七(約一・六八、 又四〇・三、約一、  
 一・二六、二・三九、 一四・六七、一六・六 一九・一、徒一九、  
 五一、四・一六約 約一九・一九(徒二 太四・一七、可一、 二三)

ラ約一・二六を見よ 九一・一 路三・二 太二・二八、一七・ 一・一九加二・二 九二・四 太二七・  
 ム約一・三三 一・二二(約一・三二) 五可一・一、九・ コ出三四・二八 王上 三・一、五七路 〇來四・二四、七 五三・一、二  
 ウ路三・一七(約三〇・ 一三四) 七路三・二二、九・ 一九・八 一・三五、四四一、 三約三・八、五 五三九一・二、二二  
 二四) ク太二・二二 三五(路二〇・一三) エ撒前三・五 二・七〇 約一、 五、一〇 黙二・一 ユ申六・二六  
 井太一三・三〇 ヤ祭一・二 約一、ケ一・一七 可一・二 テ慶あり例へば太一 三四、四九、五・二 八等  
 ノ可九・四三、四八 三三、三三 二、一三路四・一 四・三三、一六・一 五、二〇三二 徒九 ア申八・三  
 オ一三一・一七 可一、マ路二・七路四二・一 一三 六、二六・六三、二 二〇羅一・四 哥 サ尼二・一、一八但

三 水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、  
 彼は聖霊と火にて汝らにバプテスマを施さん。二 手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麥は倉に納め、穀は  
 消えぬ火にて焼きつくさん』

一四三 爰にイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。一四 ヨハネ之を止めん  
 として言ふ『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、反つて我に來り給ふか』一五 イエス答へて言ひたまふ  
 一六 『今は許せ、われら斯く正しき事をことごとく爲遂ぐるは、當然なり』ヨハネ乃ち許せり。一六 イエス、バプテス  
 マを受けて直ちに水より上り給ひしとき、視よ、天ひらけ、神の御靈の、鴿のごとく降りて己が上にきたるを見  
 一七 給ふ。一七 また天より聲あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』

第四章

一 爰にイエス御靈によりて荒野に導かれ給ふ、悪魔に試みられんと爲るなり。二 四十日、四十夜、  
 斷食して、後に飢ゑたまふ。三 試むる者きたりて言ふ『なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石  
 四 をパンと爲らしめよ』四 答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に  
 六五 由る』と録されたり』五 ここに悪魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言ふ、六 『なんぢ若し神の  
 七 子ならば己が身を下に投げよ。それは『なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石  
 にうち當つること勿らしめん』と録されたるなり』七 イエス言ひたまふ『主なる汝の神を試むべからず』と、ま

九八 た録されたり』ハ悪魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その榮華とを示して言ふ。九  
 一〇 『なんぢ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんぢに與へん』一〇爰にイエス言ひ給ふ『サタンよ、退け』主なる  
 二 汝の神を拜し、ただ之にのみ事へ奉るべし』と録されたるなり』二ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち來り  
 事へぬ。

二三 イエス、ヨハネの囚はれし事をききて、ガリラヤに退き、三後ナザレを去りて、ゼブルンとナフタリとの

境なる海邊のカペナウムに到りて住み給ふ。四これは預言者イザヤによりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰

く、一五『ゼブルンの地、ナフタリの地、海の邊、ヨルダンの彼方、異邦人のガリラヤ、一六暗に坐する民は、大な

る光を見、死の地と死の蔭とに坐する者に、光のほれり』

一七この時よりイエスを教を宣べはじめて言ひ給ふ『なんぢら悔改めよ、天國は近づきたり』

一八斯て、ガリラヤの海邊をあゆみて、二人の兄弟ペテロといふシモンとその兄弟アンデレとが、海に網打ち

をるを見給ふ、かれらは漁人なり。一九これに言ひたまふ『我に従ひきたれ、然らば汝らを人を漁る者となさん』

二〇かれら直ちに網をすてて従ふ。二一更に進みゆきて、又ふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネと

が、父ゼベダイとともに舟にありて網を繕ひをるを見て呼び給へば、二三直ちに舟と父とを置きて従ふ。  
 二三 イエス徧くガリラヤを巡り、會堂にて教をなし、御國の福音を宣べつたへ、民の中のもろもろの病、もろ

イ代上二二・二一、一〇一	二二・三三、三一	徒九、二〇・二、七	ホ可一・二四	路四・	ト癸九・二、二	ル太一五・二九を見よ	一五、四四	タ太九・三五	可一・
六・九、二二、二・一	五・三三、二六・一八	口申六・二三	一四	約一・四三、	チ可一・二四、一五	ヲ太一〇・二、一六	ヨ太九・三五、一三	一四	路四・四三、
一四六、七、五三	羅二六・二〇	野後	ハ太二六・五三	路二	二・二一	リ太三・二	一八	約一・四〇、	五四
一二太一二・二六	二・二一、一一	二・四三	二・四三	ヘ可一・二二、二・二	又一八一・二二	可一・	四二	六・二	路四・二五、
可一・一三、四・一五	四、一二、七	撒前	ニ太一二・二、一四、三	路四・二三、三一、	一六・二〇	(路五・	ワ太一〇・二、三〇	六・六	一三・一〇
路一〇・一八、一一	二・一八	撒後二・	可一・一四	路三・	一〇・一五	約一・	二〇	約六・五九、一八	二〇
一八、一三・二六	九	撒二・九	二〇	一〇・一四、四六	四〇・一四二	カ可一・三九	路四・	二〇	

一六八・一六九・九・三五  
 一五・三〇・二一・一  
 四・可一・三四・三  
 一〇、五・二九路  
 四・四〇、七・二一  
 徒一〇・三八  
 太八・二六、二八、三  
 四、九・三二、一三  
 二二、一五・二二可  
 一・三三、五・一五、  
 一六、一八 路八  
 三六  
 ツ太一七・一五  
 太八・六、九、六、七  
 可二・三一、二 路  
 五・一八、二五  
 ナ可五・二〇、七・三一  
 ラ太四・一五  
 ム可三・七八 路六  
 一七  
 ウ五・一七、(路六・二  
 〇一四九)  
 可三・一三、路九二  
 八約六・三、一五  
 ノ三一・二二(路六・二  
 〇一三三)  
 六・五二・七  
 才太五・一〇、一九・一  
 四可一〇・一四路  
 一七・二一、雅二・五  
 七・一七  
 一七・二一、三(黙  
 七・一七)  
 ヤ詩三七・一一  
 マ約五五・一、二約四  
 一・六・五二・七  
 三三、三八  
 四可一〇・一四路  
 一七・二一、雅二・五  
 七・一七  
 三・二、黙二二、四  
 三・二、黙二二、四  
 エ路六・三五、羅八・一  
 四  
 二、雅五・一一、彼前三  
 一四  
 ア彼前四・一四  
 三雅一・二(來一〇・  
 三四)  
 キ代下三六・一六、太  
 二三・三七、徒七・五  
 二、二、二、一、五來  
 一・一、三三、三八  
 雅五・一〇(黙一・  
 二九)  
 ユ可九・五〇、路一四・  
 三四  
 ヌ約四・一八、約八・一  
 二、二、二、一、六  
 二、二、二、一、五來  
 可四・二一、路八・一  
 六、一一、三三

二四 もろの疾患をいやし給ふ。二四 その噂あまねくシリヤに廣まり、人々すべての惱めるもの、即ちさまざまの病と

苦痛とに罹れるもの、悪鬼に憑かれたるもの、癩癩および中風の者などを連れ來りたれば、イエス之を醫したま

二五 ふ。二五 ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの彼方より大なる群衆きたり従へり。

### 第五章

一 イエス群衆を見て、山にのぼり、坐し給へば、弟子たち御許にきたる。二 イエス口をひらき、教

へて言ひたまふ、三 『幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。四 幸福なるかな、悲

二 しみ者。その人は慰められん。五 幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。六 幸福なるかな、義に飢ゑ

一〇九 八七 六五 四三 二一 渴く者。その人は飽くことを得ん。七 幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。八 幸福なるかな、心の

清き者。その人は神を見ん。九 幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。一〇 幸福なるか

二 二 義のために責められたる者。天國はその人のものなり。一 我がために、人なんぢらを罵り、また責め、詐り

二 二 各様の悪しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。二 喜び喜び、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし

一三 預言者等をも、斯く責めたりき。

一三 汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき。後は用なし、外にすてられて人に踏

一四 一四 まるるのみ。一四 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。一五 また人は燈火をともして升の下におか

一六 一六 ず、燈臺の上におく。斯て燈火は家にある凡ての物を照すなり。一六 斯のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。

これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり。

一七 われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。一八 誠に汝

一八七 らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、悉とく全うせらるべし。一九 この故にも

一九 し此等のいと小き誠命の一つをやぶり、且その如く人に教ふる者は、天國にて最小き者と稱へられ、之を行ひ、

二〇 かつ人に教ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。二〇 我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者・パリサイ人に勝

二〇 らずば、天國に入ること能はず。

二二 二二 古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。二三 然れど我は汝ら

二二 に告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。ま

二三 た痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。二三 この故に汝もし供物を祭壇にささぐる時、そこに兄弟に怨ま

二四 るる事あるを思ひ出さば、二四 供物を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、

二五 供物をささげよ。二五 なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ。恐くは、訴ふる者なんぢを審判

二六 人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。二六 誠に、なんぢに告ぐ、一厘も残りなく償

二六 はずば、其處をいづること能はず。

二七 二七 「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり。二八 されど我は汝らに告ぐ、すべて色情を懷きて女を

二九 見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。二九 もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ、五體の一つ亡

イ彼前二・一二 三三 一四・五五、一五・一 三〇、二三・一一 四三、四五、四七路 三二、四五、四六、 一八・三、一一、一 一八・九、可九、

ロ太九・八を見よ 水太二三・二三、二八 一五 路二二・六六約一一 〇、二四・二〇 一二・五路三・六 一八・三、一一、一 一八・九、可九、

ハ羅三・三一 へ太五・三三 一五 路二二・六六約一一 〇、二四・二〇 一二・五路三・六 一八・三、一一、一 一八・九、可九、

ニ太二四・三四、三五 二六・一七、三一 一七 路一六・一七、三一 一七 路二二・六六約一一 〇、二四・二〇 一二・五路三・六 一八・三、一一、一 一八・九、可九、



レ六五・二二  
ソ太一八・八 可九・四 ナ太五・二一  
三 九 二二 徒七・四九  
ツ申二四・一三 〇・二申二三・二一  
オ太一九・九可一〇 (太二三・一六 提前  
一一 路一六・一八 一・一〇)  
(好前七・一〇、一 ム雅五・二二  
ク太六・一三、一三、一  
九、三八 約一七・一 マ彼二〇・二二、二四、  
五弗六・一六 撒後 二九路六・二九 羅  
三・三約登二・一三、 一二・一七、一九 哥  
三・一二五・二八 前六・七 撒前五・一  
ヤ出二二・二四 利 五彼前三・九  
二四・二〇 申一九、ケ 變五〇・六 哀三・三  
二一 〇 一二・一七、一二  
(撒前五・一五)  
ワ 變六六・一 太二三  
二二 徒七・四九  
井 變六六・一 徒七・四  
九  
ノ 詩四八・二  
オ 雅五・一二  
ク 太六・一三、一三、一  
九、三八 約一七・一  
マ 彼二〇・二二、二四、  
二九路六・二九 羅  
コ 利一九・一八  
エ 申二三・六 詩四一・  
一〇  
テ 路六・二七、三五 羅  
サ 太五・九  
六〇 羅二二・一四  
哥 前四・二二、一三  
彼 前二・二三、三、九

三〇 びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。三〇もし右の手なんぢを踏かせば、切りて棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに往かぬは益なり。三一また「妻をいだす者は離縁状を與ふべし」と云へることあり。三二されど我は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり。

三三 また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる事あるを汝ら聞けり。三四されど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。三五地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。三六己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに白くし、また黒くし能はねばなり。三七ただ然り然り、否否といへ、之に過ぐるは悪より出づるなり。

三八「目には目を、齒には齒を」と云へることあるを汝ら聞けり。三九されど我は汝らに告ぐ、悪しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頬をうたば、左をも向けよ。四〇なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。四一人もし汝に一里ゆくことを強ひなば、共に二里ゆけ。四二なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。

四三「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。四四されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。四五これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父は

その日を悪しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。四六 なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。四七 兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。四八 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

### 第六章

一 汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

- 二 さらば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて會堂や街にて爲すごとく、己が前にラツパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。三 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。四 是はその施濟の隠れん爲なり。然らば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。
- 五 なんぢら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。六 なんぢは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。七 また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。八 さらば彼らに效ふな、汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。九 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。一〇 御國の來らんことを。一一 御意の天のごとく、地にも行はれん事を。一二 我らの

イ路六・三二 彼前一・一五、一六 一五  
 口制一七一利一一・ 八太六・五、一六、二三 ホ太六・五、一六 一五  
 四四一九・二路六 五 へ太六六・一八路一 八・二一、二三 路一  
 三六 西一・二八、 二詩一一二九 羅一 四・一四 八・二一、一六 一六  
 四・二二 雅一・四 二・八 哥後九・六一 ト太六・一、一六 二三 又王下四・三三 但六・九  
 一〇 力太六・三二 一〇  
 九 九一・一三 路一・ 一  
 二 二一四 二  
 二 二二一、一四 二  
 一 太二六・三九、四 二  
 二 二二一、一四 二

ツ出六六・一一一三六  
三〇〇・八約四・三  
二、三四、六・三五  
九 縣三・一〇  
ウ太一八・三一三五  
ヲ太五・三七約一七・  
ナ太二六・四一 路二  
二、四〇、四六前  
ム可一一・二五前四・  
三三二西三・二二  
ウ太一八・三五 雅二、  
一三  
井養五八・五  
ノ太六・二  
オ得三・三 俱一〇・三  
太六・四、六  
マ太二九・二一可一〇  
一八・二二 提三六、  
ヲ路二二・三四  
フ路二二・三四  
マ路二二・三四  
三四、三五(太二〇)・  
一五可七・二二  
コ路一六・九、一一、一  
三加一・一〇 雅四  
四約三二・一五  
テ二五・三三 路一二  
二二五・三一  
ア路二五・二二 太六、  
二七二八・三三  
四路一〇・四二、一  
二二・二二、二二  
イ路七・三 一 腓四、  
六 腓前五・七  
サ 伯三・八、四一 詩一  
四七九 太一〇・二  
九一三 路二二、  
二四一三一

日用の糧を今日もあたへ給へ。 二 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。 三 我らを嘗試に遇せず、悪より救ひ出したまへ。 四 汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。 五 もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。

一六 一六 なんぢら斷食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは斷食することを人に顯さんとて、その顔色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。 一七 なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顔をあらへ。 一八 これ斷食することの人に顯れずして、隠れたるに在す汝の父にあらはれん爲なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

一九 なんぢら己がために財寶を地に積むな、ここは蟲と鏽とが損ひ、盗人うがちて盗むなり。 二〇 なんぢら己がために財寶を天に積み、かしこは蟲と鏽とが損はず、盗人うがちて盗まぬなり。 二一 なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。 二二 身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。 二三 然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。 二四 人は二人の主に兼事ふることに能はず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを輕しむべければなり。 汝ら神と富とに兼事ふること能はず。 二五 この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まん、何を思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな。 生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。 二六 空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。 汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。 二七 汝らの

二八 中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。二八 又なにゆる衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何して育つか  
 二九 を思へ、勞せず、紡がざるなり。三九 然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の  
 三〇 一つにも及かざりき。三〇 今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装ひ給へば、まして汝らを  
 三一 や、ああ信仰うすき者よ。三一 さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。三三 是みな異邦人の切に求む  
 三二 る所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なを知り給ふなり。三三 まづ神の國と神の義とを求め  
 三四 よ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。三四 この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思  
 ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。

第七章

一 なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。二 己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量  
 三 にて己も量らるべし。三 何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。四 視  
 よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。五 偽善者  
 よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。  
 六 聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐くは足にて踏みつけ、向き反りて汝らを嘔みやぶ  
 らん。

七 求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。八 すべて求むる者は  
 九 得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。九 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與

イ詩五五・三二 太六・ロ(詩三九・五) へ王上三・二一—二四 一、一八・二九 提前 一四・三、四、一〇、ル路六・四一、四二 約九・三一、一四・一  
 二七、二八、三一、三三 八王上二〇・四—七 路一・三—一 一三 哥前四・三一 七七一—一 路一・一 三、一五・七、一六、カ後八・一七 耶二九  
 四路一〇・四—一 二太八・二六、一四、ト(詩三七・二五 太一 三一—五 路六・三七、 五雅四・一、一、二二 九一—三 二二、二四 雅一、 一二、一三  
 二・二一、二二、二三 三一、一六、八 九二八 可一〇・二 三八、四一、四二 又可四・二四 路六、 七太一八・一九、二一、 五、五・二五、一六 ヨ路一一・一一  
 四四 六 彼前五・七 ホ太六・八 九、三〇 路一・三 三 路六・三七 雅二・一、 三八 二二 可一・二、二四 約三・二二、 五、

タ路六・三一  
 レ利一九・一八 太二  
 二・四〇 羅一三・八  
 一・一〇 加五・一四  
 雅二・八  
 ソ路一三・二四  
 ツ太二四・五、一一、二  
 四可一三・二二 路  
 六・二六 徒一三・六  
 彼後二・一 約壹四  
 一(提後三・五)  
 ネ米三・五  
 ナ結二二・二七 約一  
 〇・一二 徒二〇・二  
 九三〇  
 ム太一二・三三  
 ウ太三・一〇 路三  
 九、一三・七(西一)  
 三三 路六・四四 雅  
 一〇 多三・一四  
 井太七・一六、一一、二  
 三三 路六・四四 雅  
 三・二二  
 ク(太二五・一一) 一  
 ノ太二五・一一、一二  
 路六・四六、一三  
 二五 雅一・二二  
 才太一〇・一五  
 ク(太二五・一一) 一  
 三 路一三・二五  
 二七  
 ヤ哥前一二・二  
 マ太二五・一二 路  
 一三・二五、二七  
 ケ詩五・五、六、八  
 太二五・四一 路一  
 三・二七  
 フ二四・二七 路六  
 四七・四九(雅一  
 二二・二五)

二〇 へ、魚を求めんに蛇を與へんや。二 然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まし

三 て天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。三 然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも

一四三 亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

一三 狭き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし。一四 生命にいたる門は狭

く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

一六五 一五 偽預言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は奪ひ掠むる豺狼なり。一六 その果によりて彼らを知るべ

一七 し。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。一七 斯く、すべて善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡し

一八 き果をむすぶ。一八 善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず、惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。一九 すべて善き果を

二〇 結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらる。二〇 然らば、その果によりて彼らを知るべし。二一 我に對ひて主よ主よと

二二 いふ者、ことごとくは天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。二三 その日

二三 おほくの者、われに對ひて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだし、汝の

二四 名によりて多くの能力ある業を爲ししにあらずや」と言はん。二三 その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知

二五 らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

二六 二四 さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。二五 雨ふり流張り、

二六 風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。二六 すべて我がこれらの言をききて行はぬ者

二七 を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。二七 雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はな  
 はだし』

二八 二八 イエスこれらの言を語りてへ給へるとき、群衆その教に驚きたり。二九 それは學者らの如くならず、權威あ  
 る者のごとく教へ給へる故なり。

### 第八章

一 イエス山を下り給ひしとき、大なる群衆これに従ふ。二 視よ、一人の癩病人みもとに來り、拜し  
 て言ふ『主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』三 イエス手をのべ、彼につけて『わが意な  
 り、潔くなれ』と言ひ給へば、癩病ただちに潔れり。四 イエス言ひ給ふ『つつしみて誰にも語るな、ただ往きて  
 己を祭司に見せ、モーセが命じたる供物を獻げて、人々に證せよ』

五 イエス、カペナウムに入り給ひしとき、百卒長きたり、六 請ひていふ『主よ、わが僕、中風を病み、家に  
 臥しゐて甚く苦しめり』七 イエス言ひ給ふ『われ往きて醫さん』八 百卒長こたへて言ふ『主よ、我は汝をわが屋  
 根の下に入れ奉るに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜へ、さらば我が僕はいえん。九 我みづから權威の下にある  
 者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言へば往き、彼に「きたれ」と言へば來り、わが僕に「こ  
 れを爲せ」といへば爲すなり』一〇 イエス聞きて怪しみ、從へる人々に言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、斯る篤き  
 信仰はイスラエルの中の一にだに見しことなし。二 又なんぢらに告ぐ、多くの人、東より西より來り、アブラ  
 ハム、イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、三 御國の子らは外の暗に逐ひ出され、そこにて哀哭・切齒する  
 ハム、イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、三 御國の子らは外の暗に逐ひ出され、そこにて哀哭・切齒する』

イ太一三・五四、二二、ハ二一四 可一・四〇 二六、二〇 二〇 約 五・四三、七・三六、 二一三二 可一・四 子太四・二四、 四九・一二、 五九  
 三三可一・二二、六 一四四 路五・二二 九・三八 八・三〇、九・九路 四路五・二四、一 路一五・一九、二一 一九馬一・二一路 三〇 彼後二一七  
 二二、二一・一八 路 一四 一六九・三〇、一二、 四・四一、八・五六、 七・一四 又詩一〇七・二〇 一三・二九 一三三・四二、五〇、  
 四三二 約七・四六 二太二・二、九・一八、 一六、一七、九 可 九・二二 一五・一三 路七 一 路創一三・三三、三三 一三三・三三、  
 口 約七・四六 一五・二五、一八 一四四、三・二二、 へ利三・四九、一四、 一四、一一・二〇、 一三三・三三、三五 路五・一三、二八

ヨ太九二二、二九  
 タ一四一六可一  
 二九一三四 路四  
 三八一四一  
 レ哥前九二五

ソ太四二四を見よ  
 ヲ太四二二  
 五七一六〇  
 ム屢あり例へは但七  
 一三三 太九六、一  
 二八、三二、四〇、

ラ一九一三二 路九  
 一三三三七、四一、一  
 六、一三二七、一七  
 九、一九二八、二  
 六、六四可八三八  
 路九五八、一二、

八、一八八、二一、  
 三六約一、五一、三  
 一三、六二七、五  
 三、六二、九、三五、  
 二二三四 徒七、五

六  
 ウ王上一九二〇  
 井太九九、一六、二四  
 可二、一四 路九、五  
 九約一、四三、二一

一九、二二  
 二二、二七  
 三六、一四一  
 路八、  
 二二、二五  
 一、一六、八

ク詩六五、七、八九  
 九、一〇七、二九  
 ヤ二八、一三四 可五、  
 一、一七 路八、二  
 六、一三七  
 マ太四二四を見よ

一三 ことあらん』<sup>一三</sup>イエス百卒長に『ゆけ、汝の信ずるとく汝になれ』<sup>一四</sup>と言ひ給へば、このとき僕いえたり。

一四 イエス、ペテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥しをるを見、<sup>一五</sup>その手に觸り給へば、熱去り、女お

一六 きてイエスに事ふ。<sup>一六</sup>夕になりて、人々、悪鬼に憑かれたる者をおほく御許につれ來りたれば、イエス言にて靈

一七 を逐ひだし、病める者をとくと醫し給へり。<sup>一七</sup>これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患をう

一八 け、我らの病を負ふ』と云はれし言の成就せん爲なり。

一九 さてイエス群衆の己を環れるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給ふ。<sup>一九</sup>一人の學者

二〇 きたりて言ふ『師よ何處にゆき給ふとも、我は從はん』<sup>二〇</sup>イエス言ひたまふ『狐は穴あり、空の鳥は埒あり、然

二一 れど人の子は枕する所なし』<sup>二一</sup>また弟子の一人いふ『主よ、先づ往きて我が父を葬ることを許したまへ』<sup>二二</sup>イエ

二二 ス言ひたまふ『我に從へ、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

二三 かくて舟に乗り給へば、弟子たちも從ふ。<sup>二四</sup>視よ、海に大なる暴風おこりて、舟、波に蔽はるるばかりな

二四 るに、イエスは眠りぬ給ふ。<sup>二五</sup>弟子たち御許にゆき、起して言ふ『主よ、救ひたまへ、我らは亡ぶ』<sup>二六</sup>彼らに言

二五 ひ給ふ『なにゆる臆するか、信仰うすき者よ』<sup>二七</sup>乃ち起きて、風と海とを禁め給へば、大なる風となりぬ。<sup>二七</sup>人々

二六 あやしみて言ふ『こは如何なる人ぞ、風も海も從ふとは』

二七 二八 イエス彼方にわたり、ガダラ人の地にゆき給ひしとき、悪鬼に憑かれたる二人のもの、墓より出できたり

二八 て之に遇ふ。その猛きこと甚だしく、其處の途を人の過ぎ得ぬほどなり。<sup>二九</sup>視よ、かれら叫びて言ふ『神の子

よ、われら汝と何の關係あらん。未だ時いたらぬに、我らを責めんとて此處にきたり給ふか』<sup>三〇</sup>遙にへだたりて多くの豚の一群、食しむたりしが、<sup>三一</sup>悪鬼ども請ひて言ふ『もし我らを逐ひ出さんとならば、豚の群に遣したまへ』<sup>三二</sup>彼らに言ひ給ふ『ゆけ』悪鬼いでて豚に入りたれば、視よ、その群みな崖より海に駈け下りて、水に死にたり。<sup>三三</sup>飼ふ者ども逃げて町にゆき、凡ての事と悪鬼に憑かれたりし者の事とを告げたれば、<sup>三四</sup>視よ、町人ぞぞりてイエスに逢はんとて出できたり、彼を見て、この地方より去り給はんことを請へり。

### 第九章

一 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給ふ。<sup>二</sup>視よ、中風にて床に臥しをる者を、人々みもとに連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』<sup>三</sup>視よ、或る學者ら心の中にいふ『この人は神を瀆すなり』<sup>四</sup>イエスその思を知りて言ひ給ふ『何ゆゑ心に悪しき事をおもふか。』<sup>五</sup>汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、孰か易き。<sup>六</sup>人の子、地にて罪を赦す權威あることを汝らに知らせん爲に』——ここに中風の者に言ひ給ふ——『起きよ、床をとりて汝の家にかへれ』<sup>七</sup>彼おきて、その家にかへる。<sup>八</sup>群衆これを見ておそれ、斯る能力を人にあたへ給へる神を崇めた

り。  
九 イエス此處より進みて、マタイといふ人の收税所に坐しをるを見て『我に従へ』<sup>一〇</sup>と言ひ給へば、立ちて従へり。

一〇 家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多くの取税人・罪人ら來りて、イエス及び弟子たちと共に列

イ士一・一二 母後 四、五・七 路四、ハ太四・二三  
 一六・二〇、一九・二 三四、八・二八 約 二二・八 可二・三一  
 二 王上一七・一八 二・四 路五・二八  
 王下三・二三 代下 口路五八 徒一六・三 ホ太四・二四、九六  
 三五・二一 可一・二 九 太八・二〇  
 ト太九・二二、一四・二 七可六・五〇、一〇・二  
 四九約一六・三三 詩一三九・二 太二  
 徒二三・二 二・二五 可二・二二  
 可二・五、九 路五・ 五 路六・八、九  
 二〇、二三、七、四八 又太八・二〇を見よ  
 ル太一五・三一 可二、  
 一五八 徒四・二  
 後九・二三 加一・二  
 彼前二・二二 一  
 四九・一七 可二・二  
 路五・二 一五八 徒四・二  
 七・一三 可二・二  
 徒五・二七、六、一五  
 徒八・二三 可二・二  
 カ太八・二三を見よ



ヨ太一・一九可二、レ何六・六太一二七、ネ路一八・二二、ム民一五・三八、申二、井太九・二、二九、一五・二八、(徒二〇・九、一〇)  
 一六、路五・三〇、ソ太一二・七、ナ一八・二六、可五、二・二二太一四・三、ノ可五・三四、一〇・五、オ(代下三五・二五耶  
 一五・二、ツ可二・一七路五・三、二二・四三、路八、六、二三・五、二、路七・五〇、八、九・一七、一六・六  
 夕可二・一七路五・三、二、一五・七提前一、四一・五六、ウ太一四・三六(可三、四八、一七・二九、結二四・一七)  
 一、一五、ラ太八・二、一〇路六・一九、一八・四二(太九、ク約一一・二一—一四

二二 する。二 パリサイ人これを見て弟子たちに言ふ『なに故なんぢらの師は、取税人・罪人らと共に食するか』三 之を  
 二三 聞きて言ひたまふ『健かなる者は醫者を要せず、ただ病める者これを要す。三 なんぢら往きて學べ』われ憐憫を  
 好みて、犠牲を好まず』とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』  
 二四 爰にヨハネの弟子たち御許にきたりて言ふ『われらとパリサイ人とは斷食するに、何故なんぢの弟子たち  
 二五 は斷食せぬか』二五 イエス言ひたまふ『新郎の友だち、新郎と偕に在る間は、悲しむことを得んや。されど新郎を  
 二六 とらるる日きたらん、その時には斷食せん。二六 誰も新しき布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、そ  
 二七 の衣をやぶりて、破綻さらに甚だしかるべし。二七 また新しき葡萄酒をふるき革囊に入ることは爲じ。もし然せ  
 ば囊はりさけ、酒ほどばしり出でて、囊もまた廢らん。新しき葡萄酒は新しき革囊にいれ、斯て兩ながら保つな  
 り』

二八 一八 イエス此等のことを語り給ふとき、視よ、一人の司きたり、拜して言ふ『わが娘いま死にたり。然れど  
 二九 來りて御手を之におき給はば活きん』二九 イエス起ちて彼に伴ひ給ふに、弟子たちも從ふ。三〇 視よ、十二年血漏を  
 三〇 患ひゐたる女、イエスの後にきたりて、御衣の總にさはる。三二 それは御衣にだに觸らば救はれんと心の中にいへ  
 三三 なるなり。三三 イエスふりかへり、女を見て言ひたまふ『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり』女この時より  
 三四 救はれたり。三三 斯てイエス司の家に行たり、笛ふく者と騒ぐ群衆とを見て言ひたまふ、三四 退け、少女は死にたる  
 三五 にあらず、寐ねたるなり』人々イエスを嘲笑ふ。三五 群衆の出されし後、いりてその手をとり給へば、少女おきた

三六 り。この聲聞あまねく其の地に弘まりぬ。

三七 イエス此處より進みたまふ時、ふたりの盲人さげびて『ダビデの子よ、我らを憫みたまへ』と言ひつつ從

三八 ふ。イエス家にいたり給ひしに、盲人ども御許に來りたれば、之に言ひたまふ『我この事をなし得と信ずる

三九 か』彼等いふ『主よ、然り』爰にイエスカれらの目に觸りて言ひたまふ『なんぢらの信仰のごとく汝らに成

四〇 れ』乃ち彼らの目あきたり。イエス嚴しく戒めて言ひたまふ『慎みて誰にも知らすな』されど彼ら出でて、

徧くその地にイエスの事をいひ弘めたり。

四一 盲人どもの出づるとき、視よ、人々、悪鬼に憑かれたる啞者を御許につれきたる。悪鬼おひ出されて啞

四二 者ものいひたれば、群衆あやしみて言ふ『かかる事は未だイスラエルの中に顯れざりき』然るにパリサイ人

四三 ふ『かれは悪鬼の首によりて悪鬼を逐ひ出すなり』

四四 イエス徧く町と村とを巡り、その會堂にて教へ、御國の福音を宣べつたへ、諸般の病、もろもろの疾患を

四五 いやし給ふ。また群衆を見て、その牧者なき羊のごとく悩み、且たふるるを甚く憫み、遂に弟子たちに言

四六 ひたまふ『收穫はおほく労働人はすくなし。この故に收穫の主に労働人をその收穫場に遣し給はんことを求め

よ』

### 第一〇章

一 斯てイエスその十二弟子を召し、穢れし靈を制する權威をあたへて、之を逐ひ出し、もろもろの病、もろもろの疾患を醫すことを得しめ給ふ。

イ太四・二四、九・三	口太一・一、一二・三	四八、一二・三五	二太八・四を見よ	チ太一二・二四、可三	ヲ太一四・一四、一五・	可六・三四	レ路九・一
一、一四・一可一	三、一五・二二、二	路一八・三八、三九、	ホ太四・二四を見よ	二二・路一・一五	三二、可六・三四、	カ路一〇・二	
二八、四五、路四・一	〇・三、三二、二	二〇・四一、四四	ヘ(太一二・二二)二	リ太四・二三を見よ	八・二	ヨ路一〇・二	
四、三七、五・一五、	一・九、一五、二二、	八太八・一三(太九・	四)	又太四・二三を見よ	ワ民二七・一七、結三	タ可三・一三一、一五	
七・一七	四二可一〇・四七、	二二)	ト可二・二二	ル太四・二三を見よ	四・五、強一〇・二	六七	

二二四 可三・一六 (約一・四四) 才可三・一八 (路六・マ五下七・二四一四) 五、一〇四一・二二  
 一一九 路六・一四 (約一・四五) 一六 徒一・一三 (路二・三五) 三一 彼後二・九、キ路一〇・三  
 一六 徒一・一三 約二一・二六、一四 三、一〇・三三、一 七 哥前九・二四 提前 三・七 約壹四・一七 ユ創三・一 羅一六・一  
 太四・二八を見よ 五、二〇・二四一・二 三 七・一六 約四・九、 五・一八 猶六 九  
 太四・二八を見よ 九、二一・二 八、四八 八、四八 一八・二六 一・九 (何七・一一) 一 (何七・一一)  
 太四・二一 徒二・二 井太九・九 二・三 約六・七一、ケ九一・一五 可六・八 エ徒一三・五一 二九 太一・二四 二五 太五・二二を見よ  
 二 可一五・四〇 一三・二、二一、二六 一 路九・三一 太一・二二、二四、 彼後二・六 猶七 シ太二三・三四 可一

十二使徒の名は左のごとし。先づペテロといふシモン及びその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ及びその兄弟ヨハネ、三ピリポ及びバルトロマイ、トマス及び取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブ及びタダイ、四熱心のシモン及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りし者なり、五イエスこの十二人を遣さんとて、命じて言ひたまふ、

「異邦人の途にゆくな、又サマリヤ人の町に入るな。六寧ろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。七往きて

宣べつたへ「天國は近づけり」と言へ。八病める者をいやし、死にたる者を甦へらせ、癩病人をきよめ、悪鬼を

逐ひいだせ。價なしに受けたれば價なしに與へよ。九帯のなかに金・銀または錢をもつな。一〇旅の囊も、二枚の

下衣も、鞋も、杖ももつな。一労働人の、その食物を得るは相應しきなり。二何れの町、いづれの村に入るとも、

その中にて相應しき者を尋ねいだし、立ち去るまでは其處に留れ。三人の家に入らば平安を祈れ。四その家も

し之に相應しくば、汝らの祈る平安は、その上に臨まん。もし相應しからずば、その平安は、なんぢらに歸ら

ん。一四人もし汝らを受けず、汝らの言を聽かずば、その家、その町を立ち去るとき、足の塵をはらへ。一五誠に汝

らに告ぐ、審判の日には、その町よりもソドム、ゴモラの地のかた耐へ易からん。

一六視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼のなかに入るが如し。この故に蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直

なれ。一七人々に心せよ、それは汝らを衆議所に付し、會堂にて鞭たん。一八また汝等わが故によりて、司たち王た

一九 ちの前に曳かれん。これは彼らと異邦人とに證をなさん爲なり。一九 かれら汝らを付さば、如何なにを言はんと思

二〇 ひ煩ふな、言ふべき事は、その時さづけられるべし。二〇 これ言ふものは汝等にあらす、其の中にありて言ひたまふ

二一 汝らの父の靈なり。二一 兄弟は兄弟を、父は子を死に付し、子どもは親に逆ひて之を死なしめん。二三 又なんぢら我

二二 が名のために凡ての人に憎まれん。されど終まで耐へ忍ぶものは救はるべし。二三 この町にて、責めらるる時は、

二三 この町に逃れよ。誠に汝らに告ぐ、なんぢらイスラエルの町々を巡り盡さぬうちに人の子は來るべし。

二四 弟子はその師にまさらず、僕はその主にまさらず、二五 弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足

二六 れり。もし家主をベルゼブルと呼びたらんには、況てその家の者をや。二六 この故に、彼らを懼るな。蔽はれたる

二七 ものに露れぬはなく、隠れたるものに知られぬは無ければなり。二七 暗黒にて我が告ぐることを光明にて言へ。耳

二八 をあてて聽くことを屋の上にて宣べよ。二八 身を殺して靈魂をこらし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナに

二九 て滅し得る者をおそれよ。二九 二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝らの父の許なくば、その一羽も地に

三〇 落つること無からん。三〇 汝らの頭の髪までも皆かぞへらる。三一 この故におそるな、汝らは多くの雀よりも優るる

三二 なり。三二 然れば凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。三三 され

三三 ど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。

三四 われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな、平和にあらず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。三五 それ我が

イ一九—二二可一三 二太一〇・三五・三六 リ路六・四〇 二二六—三三路二二 二二二

二二—二三路二 二太二四・九(約一五) 又約一三・一六、一五 二一九

一・二二—一七 一八一—二二 二二〇

口路二二・一一 へ太二四・一三 默二・ 二四、二七 可三・ 七、二二—二二

八、一三—九 撒前 二太二三・三四 二二路一・一五、 七、二二—一八 徒 一五二

二・二三 二太一六・二七、二八 一八、一九 夕來一〇・三一 雅四 二七、三四 三三四、三五路二二

四) 五一—五三(默六)

ム米七・六 太一〇・二 三四 路九・二三、 一六 約一三・二〇 八一三五 來一〇・三七(太一) ア太一三・二一、五七、  
 一四・二七 (加四・一四) フ太一四・三可六・一 一・一〇) 二四・一〇、二六・三  
 ウ詩四一・九、五五・一 才太一六・二五可八、 ヤ可九・三七 路九・四 七 (興二九・一八、三 一可六・三 約六・  
 二一・一四 米七・六 三五 路九・二四、 八(約一・二四四) コ創四九・一〇 民二 五・五、六、四二・七) 六一、一六・一(太五  
 約一三・二八 一七・三三 約一二・ マ可九・四一 來六・一 四・二七 詩一八・ 一(廢六一・一) 路四・ 二九)  
 井路一四・二六 二五 〇(太二五・四〇) 二六 但九・二五 約 一八、六・二〇 雅 サ太三・一  
 ノ太一六・二四可八、 ク太一八・五路一〇、 ケ二一・一九 路七・一 六・二四、二一・二七 二・五 二(弗四・一四)

三六 來れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嬢より分たん爲なり。 三六 人の仇はその家の者なるべ  
 三七 我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず。 我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應し  
 三九 又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからず。 三九 生命を得る者は、これを失ひ、我が  
 四一 ために生命を失ふ者は、これを得べし。

四一 汝らを受くる者は、我を受くるなり。 我を遣し給ひし者を受くるなり。 四一 預言者たる名  
 の故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆゑに義人を受くる者は、義人の報を受くべし。  
 四二 凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝らに告ぐ、必ず  
 その報を失はざるべし』

第一章

一 イエス十二弟子に命じ終へてのち、町々にて教へ、かつ宣傳へんとて、此處を去り給へり。  
 二 ヨハネ牢舎にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、三 イエスに言はしむ『來るべき  
 者は汝なるか、或は他に待つべきか』 四 答へて言ひたまふ『ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。 五 盲  
 人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。  
 六 おほよそ我に躓かぬ者は幸福なり』 七 彼らの歸りたるをり、ヨハネの事を群衆に言ひ出でたまふ『なんぢら何  
 八 を眺めんとて野に出でし、風にそよぐ葦なるか。 八 然らば何を見んとて出でし、柔かき衣を著たる人なるか。 視

九 よ、やはらかき衣を著たる者は王の家<sup>いへ</sup>に在り。九さらば何のために出でし、預言者を見んとてか。然り、汝らに  
 一〇 告ぐ、預言者よりも勝る者なり。一〇「視よ、わが使をなんぢの顔の前につかはす。彼は、なんぢの前に、なんぢの  
 二 道をそなへん」と録されたるは此の人なり。二誠に汝らに告ぐ、女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネよ  
 三 り大なる者は起らざりき。然れど天國にて小き者も、彼よりは大きなり。三バプテスマのヨハネの時より、今に至  
 四 るまで、天國は烈しく攻めらる、烈しく攻むる者は、これを奪ふ。三凡ての預言者と律法との預言したるは、ヨ  
 一四 ハネの時までなり。一四もし汝等わが言をうけんことを願はば、來るべきエリヤは此の人なり、一五耳ある者は聽く  
 一七 べし。一六われ今の代を何に比へん、童子、市場に坐し、友を呼びて、一七われら汝等のために笛吹きたれど汝ら踊  
 一八 らず、歎きたれど汝ら胸うたざりき」と言ふに似たり。一八それはヨハネ來りて、飲食せざれば「悪鬼に憑かれた  
 一九 る者なり」といひ、一九人の子、來りて飲食すれば「視よ、食を貪り、酒を好む人、また取税人・罪人の友なり」  
 二〇 と言ふなり。されど智慧は己が業によりて正しとせらる」二〇爰にイエス多くの能力ある業を行ひ給へる町々の悔  
 二 改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ、二「禍害なる哉、コラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ、汝らの中に  
 三 行ひたる能力ある業をツロとシドンとにて行ひしならば、彼らは早く荒布を著、灰の中にて悔改めしならん。  
 三三 三されば汝らに告ぐ、審判の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐へ易からん。三三カペナウムよ、なんぢは  
 天にまで擧げらるべきか、黄泉にまで下らん。汝のうちにて行ひたる能力ある業をソドムにて行ひしならば、今  
 二四 日までも、かの町は遺りしならん。二四然れば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐へ易から

イ太一四・五、二二・二 七、七六、七、七二七 七約一・二二 へ太三・四路一・二五 路九・一〇約一・四 二四、三一 路六・一 一・一八、六、八、  
 六路一・七六、二〇 八路一六・一六 ホ太一三・九、四三可 ト太九・一一路一五 路九・一〇約一・四 七徒二二・二〇 一〇・一三、一四  
 六 二馬四・五、太一七・一 四・九、二三 路八・ 二 四、一二、二一 路太一〇・一五を見よ 太一六・一八 路一 二〇・一三、一四  
 口察四〇・三、馬三・一 〇一・一二 可九・一 八、一四、三五 駄 二二・一、二二、一五、 一五、一六、二二 太一〇・一五、一五、一五、一五、  
 可一・二 路一・一 一一・三 路一・一 二・七を見よ 二二・七、七、 二二 二二・二七、三一 路 二二・二七、三一 路 二二・二七、三一 路

ソ二五―二七 路一〇  
 ・二二、二二  
 ツ 慶あり例へは路二  
 二・四二、二三、三四  
 約一・四一、一一、二二  
 二七―二八  
 ネ 哥前一・二六―二九  
 ナ 太二八・一八約三・  
 三五、二三、三一、一七  
 ム 耶三一・二五(約七・  
 三七)  
 二九  
 五、一〇、一五、一  
 井 約一三・一五 弗四・  
 七・二五  
 二〇 群二・五 彼前  
 二・二一 約壹二・六  
 ノ 耶六・一六  
 三〇 二九、八・五  
 ウ 哥後一〇・一  
 井 約一三・一五 弗四・  
 七・二五  
 二〇 群二・五 彼前  
 二・二一 約壹二・六  
 ノ 耶六・一六  
 三一 八、五  
 オ 一―八 可二・二三  
 一―二八 路六・一  
 三二 一四、一四・三  
 三三 一〇、七・二  
 三九 九・一六  
 マ 母前二・三一、一六  
 ヤ 太二・二一〇 路一  
 ケ 來九・二を見よ  
 三六 路六・六一  
 一  
 フ 民二八・九、一〇  
 コ 太二・四一、四二  
 エ 何六・六 太九・一三  
 サ 太二・二を見よ  
 ア 九―一四 可三・一

ん

二五 その時イエス答へて言ひたまふ「天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顯し給へり。二六 父よ、然り、斯の如きは御意に適へるなり。二七 凡ての物は我わが父より委ねられたり。二八 子を知る者は父の外になく、父をしる者は子また子の欲するままに顯すところの者の外になし。二九 凡て勞する者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。三〇 我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。三〇 わが軛は易く、わが荷は輕ければなり」

第二章

一 その頃イエス安息日に麥島をとほり給ひしに、弟子たち飢ゑて穂を摘み、食ひ始めたるを、二パ  
 リサイ人、見てイエスに言ふ「視よ、なんぢの弟子は安息日に爲まじき事をなす」三 彼らに言ひ給  
 ふ「ダビデがその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事を讀まぬか。四 即ち神の家に入りて、祭司のほか  
 は、己もその伴へる人々も食ふまじき供のパンを食へり。五 また安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せど  
 も、罪なきことを律法にて讀まぬか。六 われ汝らに告ぐ、宮より大なる者ここに在り。七 われ憐憫を好みて、犠  
 牲を好まず」とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。八 それ人の子は安息日  
 の主たるなり」

九 イエス此處を去りて、彼らの會堂に入り給ひしに、一〇 視よ、片手なえたる人あり。人々イエスを訴へんと  
 思ひ、問ひていふ「安息日に人を醫すことは善きか」一一 彼らに言ひたまふ「汝等のうち一匹の羊をもてる者あら





ツ路一・二三(可九) ナ可一〇・三〇 路一 四・二〇 多二・二二 四・一三 六二・五・一 一・二二 路一・一 四路二一・二九一 四路二一・二九一  
 四〇 路九・五〇 六八・一八・三〇、 來六・五 八路六・四五 雅三 一六・二九 約二・一 三二 (雅四・四) フ拿三・五 七太二・六・四一  
 一三三・三二 可三・二 二〇・三四・三五 弗 太七・一六 を見よ 二・二二 八、六・三〇 哥前 ク拿一・一七 コ太二・六・四二 二四・二六  
 八一三〇 路二・二 一・二二 提前四・ 太三・七・二三・三三 井太一〇・一五 を見よ 一・二二 ヤ太八・二〇 を見よ 二王上・一〇・一 代下 サ伯一・七 彼前五・八  
 一〇 八、六・一七 提後 ウ三四・三五 母前二 ノ太一六・一可八・一 オ三九一四二 太一六 マ太一六・二一 を見よ 九・一 キ賢五七・二二

家を奪ふべし。三〇 我と偕ならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は散すなり。三一 この故に汝らに告ぐ、人の

凡ての罪と瀆とは赦されん、されど御靈を瀆すことは赦されじ。三二 誰にても言をもて人の子に逆ふ者は赦され

ん、然れど言をもて聖靈に逆ふ者は、この世にても後の世にても赦されじ。三三 或は樹をも善しとし、果をも善し

とせよ。或は樹をも悪しとし、果をも悪しとせよ。樹は果によりて知らるるなり。三四 蝮の裔よ、なんぢら悪しき

者なるに、争で善きことを言ひ得んや。それ心に満つるより口に言はるるなり。三五 善き人は善き倉より善き物を

いだし、悪しき人は悪しき倉より悪しき物をいだし。三六 われ汝らに告ぐ、人の語る凡ての虚しき言は、審判の日

に糺さるべし。三七 それは汝の言によりて義とせられ、汝の言によりて罪せらるるなり』

爰に或る學者・パリサイ人ら答へて言ふ『師よ、われら汝の徴を見んことを願ふ』三九 答へて言ひたまふ

『邪曲にして不義なる代は徴を求む、されど預言者ヨナの徴のほかには徴は與へられじ。四〇 即ち「ヨナが三日三

夜、大魚の腹の中に在りし」ごとく、人の子も三日三夜、地の中に在るべきなり。四一 ニネベの人、審判のとき今

の代の人とともに立ちて之が罪を定めん、彼らはヨナの宣ぶる言によりて悔改めたり。視よ、ヨナよりも勝るも

の此處に在り。四二 南の女王、審判のとき今の代の人とともに起きて之が罪を定めん、彼はソロモンの智慧を聴か

んとて地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝る者ここに在り。四三 穢れし靈、人を出づるときは、水なき處

を巡りて休を求む、而して得ず。四四 乃ち「わが出でし家に歸らん」といひ、歸りてその家の、空きて掃き淨め

られ、飾られたるを見、四五 遂に往きて己より悪しき他の七つの靈を連れきたり、共に入りて此處に住む。されば

マタイ傳 一一・三〇—四五

其の人の後の状は前よりも悪しくなるなり。邪曲なる此の代もまた斯の如くならん』

四六 イエスなほ群衆にかたり居給ふとき、視よ、その母と兄弟たちと、彼に物言はんとて外に立つ。或人

四八 イエスに言ふ『視よ、なんぢの母と兄弟たちと、汝に物言はんとて外に立てり』四八 イエス告げし者に答へて言ひ

四九 たまふ『わが母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ』四九 斯て手をのべ、弟子たちを指して言ひたまふ『視よ、これは我

五〇 が母、わが兄弟なり。五〇 誰にても天にいます我が父の御意をおこなふ者は、即ち我が兄弟、わが姉妹、わが母

なり』

二一 一 その日イエス家を出でて、海邊に坐したまふ。二 大なる群衆みもとに集りたれば、イエスは舟に

三 乗りて坐したまひ、群衆はみな岸に立てり。三 譬にて數多のことを語りて言ひたまふ『視よ、種播

四 く者まかんとて出づ。四 播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。五 土うすき磽地に落ちし種あり、

五 土深からぬによりて速かに萌え出でたれど、六 日の昇りし時やけて根なき故に枯る。七 茨の地に落ちし種あり、

六 茨そだちて之を塞ぐ。八 良き地に落ちし種あり、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍の實を結べり。九 耳ある者

は聽くべし』

二〇 一 弟子たち御許に來りて言ふ『なにゆる譬にて彼らに語り給ふか』二 答へて言ひ給ふ『なんぢらは天國の奧

三 義を知ること許されたれど、彼らは許されず。三 それ誰にても、有てる人は與へられて愈々豊ならん。然れど

四 有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。三 この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆ

イ路一一・二六を見よ、ハ太一・一八、二・一 八、五一、約二・二、 三二、六・三約二・

彼後二・二〇 一一・四、二〇、二 三五、一一、一九 一一、七・三、五、一 一一、二五 可四・一

口四六―五〇 可三、 一、一三・五五 可 二、二五―二七 徒一 〇 徒一・一四 哥前 一一、二 路八・四一

三一―三五 路八、 六・三 路一・四三、 二、二四 九・五 加一・一九 一〇 一 創二六・二二 太一 三・二三

一九―二二 二・三三、三四、四 二太二三・五五 可三、 ホ約一五・二四 來二・ ト 可四・一 路五・三 三・二三

チ太一三・二〇―五三 又太一・一五を見よ 西一・二六、二七

等 可四・二―三四 ル太一九・一一、二〇 提前三・一六 約益

等 二二三 約六・六五 二・二〇、二七 弟一・九、三・三九 二五 路八・一八、

哥前二・一〇、一四、 太二五・二九 可四、 二五 路八・一八、

一九・二六 約一五 二八・二六、二七 羅 一・八  
 二一 (路一・二・四八 一一・八 ヨ 來五・一一  
 雅四・六) タ一六、一七 路一〇・ 一三一・二〇 路八・  
 ワ 申二九・四 賽六・ カ 賽六・九、一〇 可四 二二、二四  
 九、四二・一九、二〇 二二 路八・一〇 レ (約八・五六) 來一一 一三一・二〇 路八・  
 耶五・二一 結一一 約一一・四〇 徒二 二二 彼前一・一〇 ナ 賽五八・二 結三三・ 三四 羅一一・二 哥  
 二約一一・四〇 徒 八・二六、二七 羅一 一一二 三二、三三 可六・二 哥後四・四 加一・四 三・八  
 一八 一八一・二三 可四 〇 約五・三五 弗二・二 約壹二・一 ノ 太一三・三一、三三、 才 時一二六・六 加六・  
 一三一・二〇 路八・ 一三一・一五 一三一・一五 ム 可四・一九 路二一・ 五十一・七 四四、四五、四七、五 七一九 (可四・二六  
 二二、二四 二二 (約八・五六) 來一一 一三一・二〇 路八・ 三四 羅一一・二 哥 提前六・九、一〇、一 〇・一、二二、二二、  
 二二 彼前一・一〇 ナ 賽五八・二 結三三・ 前二・二〇、二六、 七 提前六・九、一〇、一 二五・一 可四・二  
 三二、三三 可六・二 八、三二、八、一九 井 創二六・二二 太一 六、三〇 路一三・一 八、二〇  
 三二、三三 可六・二 哥後四・四 加一・四 三・八 三・八 八、二〇

一四 けれども聽かず、また悟らぬ故なり。一四 斯てイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く、「なんぢら聞きて聞けども  
 一五 悟らず、見て見れども認めず。一五 此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶く、目は閉ぢたればなり。これ目にて見、耳  
 一六 にて聽き、心にて悟り、翻へりて、我に醫さるる事なからん爲なり」一六 されど汝らの目、なんぢらの耳は、見る  
 一七 ゆゑに、聞くゆゑに、幸福なり。一七 誠に汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見る所を見んとせしが見  
 一八 ず、なんぢらが聞く所を聞かんとせしが聞かざりしなり。一八 然れば汝ら種播く者の譬を聽け。一九 誰にても天國の  
 二〇 言をききて悟らぬときは、惡しき者きたりて、其の心に播かれたるものを奪ふ。路の傍らに播かれしとは斯る人  
 二一 なり。二〇 磽地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、二一 己に根なければ暫し耐ふるのみにて、  
 二二 御言のために艱難、あるひは迫害の起るときは、直ちに躓くものなり。二三 茨の中に播かれしとは、御言をきけど  
 二三 も、世の心勞と財貨の惑とに、御言を塞がれて實らぬものなり。二三 良き地に播かれしとは、御言をききて  
 二四 實を結びて、或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍に至るものなり」  
 二五 また他の譬を示して言ひたまふ「天國は良き種を畑にまく人のごとし。二五 人々の眠れる間に、仇きたりて  
 二六 麥のなかに毒麥を播きて去りぬ。二六 苗はえ出でて實りたるとき、毒麥もあらはる。二七 僕ども來りて家主にいふ  
 二八 「主よ、畑に播きしは良き種ならずや、然るに如何して毒麥あるか」二八 主人いふ「仇のなしたるなり」僕ども言  
 二九 ふ「さらば我らが往きて之を抜き集むるを欲するか」二九 主人いふ「いな恐らくは毒麥を抜き集めんとて麥をも共

〇に抜かん。三〇兩ながら收穫まで育つに任せよ。收穫のとき我かる者に「まづ毒麥を抜きあつめて、焚くために之

を束ね、麥はあつめて我が倉に納れよ」と言はん

三二また他の譬を示して言ひたまふ「天國は一粒の芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、三三萬

の種よりも小けれど、育ちては、他の野菜よりも大く、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり」

三三また他の譬を語りたまふ「天國はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗の粉の中に入れば、悉とく

脹れいだすなり」

三四イエスすべて此等のことを、譬にて群衆に語りたまふ、譬ならでは何事も語り給はず。三五これ預言者によ

りて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、「われ譬を設けて口を開き、世の創より隠れたる事を言ひ出さん」

三六爰に群衆を去らしめて、家に入りたまふ。弟子たち御許に來りて言ふ「畑の毒麥の譬を我らに解きたま

へ」三七答へて言ひ給ふ「良き種を播く者は人の子なり、三八畑は世界なり、良き種は天國の子どもなり、毒麥は惡

しき者の子どもなり、三九之を播きし仇は惡魔なり、收穫は世の終なり、刈る者は御使たちなり、四〇されば毒麥の

集められて火に焚かる如く、世の終にも斯くあるべし。四一人の子、その使たちを遣さん。彼ら御國の中より凡

ての顛躓となる物と不法をなす者とを集めて、四二火の爐に投げ入るべし、其處にて哀哭・切齒することあらん。

四三其のとき義人は、父の御國にて日のごとく輝かん。耳ある者は聽くべし。

四四天國は畑に隠れたる寶のごとし。人、見出さば之を隠しおきて、喜びゆき、有てる物をとごとく賣りて

イ太三・一二 八太一七・二〇 路一 太二三・二四を見よ  
ロ三二・三三 可四・三 七・六 路三三・二〇、二二  
〇一三二 路一三 二(詩一〇四・一二 結 出二・二五、一三 七利二・二一、六 一六、一七、一〇、  
一八、一九 太一三 六但四・一二) 二二、二三、二七何 ト創一八・六(士六・一 九母前二・二四) ヲ太八・二〇を見よ  
二四、三三、二八、二二、  
二四を見よ 七四 太一六・六、チ可四・三四(約一〇 六、一六、二五) カ約八・四四 徒一三、  
一六、一七、一〇、  
五・六 一八 加五・九 ヌ太一五・一五 一〇 約三・八、一 太二四・三一 太二四・三一  
レ太二三・五〇 ヲ太一三・四〇、四九、ソ太八・一二を見よ  
三 太二一・一五を見よ  
ラ太一三・四六

ム太一三・二四を見よ  
 ク太一三・二四を見よ  
 フ太七・二八を見よ  
 ア猶一  
 ウ太一三・二四を見よ  
 ヤ歌七・一三  
 コ太一三・四六を見よ  
 サ可六・三  
 井太一三・三九を見よ  
 マ五四・五八 可六  
 エ太一三・四六を見よ  
 キ太一三・六を見よ  
 ノ太一三・四二  
 一六  
 テ可一五・四〇加一  
 ユ可六・四路四・二四  
 ミ可六・一四・二九  
 オ太八・二二を見よ  
 ケ太四・二三を見よ  
 一九徒一・二・一七  
 約四・四四  
 八・二五 路三・二  
 七、一一・一  
 一九、八・三、九  
 シ太一六・二四可六  
 七一、九、一三、三一、  
 一四、八・二八 路  
 二二、七、八、一一、  
 九・七  
 一一、二五 徒四・二  
 七、一一・一

其の畑を買ふなり。

四六 又また天國は良き眞珠を求むる商人のごとし。四六 價たかき眞珠、一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく賣りて、之を買ふなり。

四七 又また天國は海におろして、各様のものを集むる網のごとし。四八 充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器に入れ、悪しきものを棄つるなり。四九 世の終にも斯くあるべし、御使等いでて、義人の中より、悪人を分ちて、五〇 之を火の爐に投げ入るべし。其處にて哀哭・切齒することあらん。

五一 汝等これらの事をみな悟りしか。彼等いふ「然り」五二 又また言ひ給ふ「この故に、天國のことを教へられたる凡ての學者は、新しき物と舊き物とをその倉より出す家主のごとし」

五三 イエスこれらの譬を終へて此處を去りたまふ。五四 己が郷にいたり、會堂にて教へ給へば、人々おどろきて言ふ「この人はこの智慧と此等の能力とを何處より得しぞ。五五 これ木匠の子にあらずや、其の母はマリヤ、其の兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや。五六 又その姉妹も皆われらと共にをるに非ずや。然るに此等のすべての事は何處より得しぞ」五七 遂に人々かれに躓けり。イエス彼らに言ひたまふ「預言者はおのが郷、おのが家の外にて尊ばれざる事なし」五八 彼らの不信仰によりて、其處にては多くの能力ある業を爲し給はざりき。

第一四章

一 そのころ、國守ヘロデ、イエスの噂をききて、ニ侍臣どもに言ふ「これバプテスマのヨハネなり。かれ死人の中より甦へりたり、然ればこそ此等の能力その内に働くなれ」三 ヘロデ先に己が見

四 弟ビリポの妻へロデヤの爲にヨハネを捕へ、縛りて獄に入れたり。ヨハネ、へロデに『かの女を納るるは宜しからず』と言ひしに因る。五 斯てへロデ、ヨハネを殺さんと思へど、群衆を懼れたり。群衆ヨハネを預言者とすればなり。六 然るにへロデの誕生日に當り、へロデヤの娘その席上に舞をまひてへロデを喜ばせられたれば、七 へロデ之に何にても求むるままに與へんと誓へり。八 娘その母に唆かされて言ふ『パプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜はれ』九 王、憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之を與ふることを命じ、一〇 人を遣し獄にてヨハネの首を斬り、二 其の首を盆にのせて持ち來らしめ、之を少女に與ふ。少女はこれを母に捧ぐ。三 ヨハネの弟子たち來り、屍體を取りて葬り、往きてイエスに告ぐ。

三 一三 イエス之を聞きて人を避け、其處より舟にのりて寂しき處に往き給ひしを、群衆ききて町々より徒歩にて從ひゆく。一四 イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を醫し給へり。一五 夕になりたれば、弟子たち御許に來りて言ふ『ことは寂しき處、はや時も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が爲に食物を買はせ給へ』一六 イエス言ひ給ふ『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を與へよ』一七 弟子たち言ふ『われらが此處にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』一八 イエス言ひ給ふ『それを我に持ちきたれ』一九 斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを裂きて、弟子たちに與へ給へば、弟子たち之を群衆に與ふ。二〇 凡ての人、食ひて飽く、裂きたる餘を集めしに十二の筐に滿ちたり。二一 食ひし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。

イ可六・一七、一九、二二 二六・一、九を見よ  
 二 路三・二九 ホ一三・二一 可六・  
 四 太四・一二を見よ 三二・四四 路九・  
 八 利一八・二六、二〇 一〇・一七 約六・  
 二二 一三・一三、一五、  
 五二・一三八) リ母前九・一三 太一  
 五・三六、二六・二 三五(羅一四・六)  
 六 可六・四一、八 又太一六・九 可六・  
 七、一四、二二 路 四三、八、九 路九・  
 二二・一七、一九、 一七 約六・一三

九二二一三三 可六・ 一二、九・一八、二 夕野四三・二、二六一 七(太二八・五路 三三四一三六(可六・ 九二一九九六六二一  
 四五―五二 約六・ 八(約六・二五) 七・七、二八・五、一 一・二二、三〇、二 五三一五六(可五・ 八二二路六・二九 井西二・八  
 一五一二二 一伯九・八 〇可六・五〇路五 〇可六・五〇路五 二〇〇 二〇〇 可七・一 一(路二一・三八) 出二二・一七、利二  
 一可一・三五、六・四 カ(二四・三七) 一〇、一三・三二 六六・三〇、八・二 六六・三〇、八・二 六六・三〇、八・二 九三三・二二、申五・一六 夕出二二・一七、利二  
 六路五・一六、六、ヨ木九・二を見よ 約六・二〇 路一・一 ソ太四・三を見よ ラ太九・二〇、二二、可 ウ可三・二九、七、一 九三三・二二、申五・一六 〇九申二七・一六  
 二二 三三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

三三 イエス直ちに弟子たちを強ひて舟に乗らせ、自ら群衆をかへす間に、彼方の岸に先に往かしむ。三三 斯て群衆を去らしめてのち、祈らんとて窃に山に登り、夕になりて獨そこに居給ふ。三四 舟ははや陸より數丁はなれ、風逆ふによりて波に難されたり。三五 夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給ひしに、三六 弟子たち其の海の上を歩み給ふを見て心騒ぎ、變化の者なりと言ひて懼れ叫ぶ。三七 イエス直ちに彼らに語りて言ひたまふ「心安かれ、我なり、懼るな」三八 ペテロ答へて言ふ「主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて、御許に到らしめ給へ」三九 「來れ」と言ひ給へば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に往く。四〇 然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ叫びて言ふ「主よ、我を救ひたまへ」四一 イエス直ちに御手を伸べ、これを捉へて言ひ給ふ「ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑ふか」四二 相共に舟に乗りしとき、風やみたり。四三 舟に居る者どもイエスを拜して言ふ「まことに汝は神の子なり」

三四 遂に渡りてゲネサレの地に著きしに、三五 其の處の人々イエスを認めて、徧く四方に人をつかはし、又すべての病める者を連れきたり、三六 ただ御衣の繒にだに觸らしめ給はんことを願ふ、觸りし者は、みな醫されたり。

**第一五章**

一 爰にパリサイ人・學者ら、エルサレムより來りてイエスに言ふ、二 「なにゆゑ汝の弟子は、古への人の言傳を犯すか、食事のときに手を洗はぬなり」 三 答へて言ひ給ふ「なにゆゑ汝らは、また汝らの言傳によりて神の誡命を犯すか、四 即ち神は「父母を敬へ」と言ひ「父また母を罵る者は必ず殺さるべし」と言ひたまへり、五 然るに汝らは「誰にても父また母に對ひて我が負ふ所のものは、供物となりたりと言はば、

六 父また母を敬ふに及ばず」と言ふ。斯くその言傳によりて神の言を空しうす。七 偽善者よ、宜なる哉イザヤは汝らに就きて能く預言せり。曰く、ハ「この民は口唇にて我を敬ふ、然れど其の心は我に遠ざかる。九 ただ徒らに我を拜む。人の訓誡を教とし教へて」。一〇 斯て群衆を呼び寄せて言ひたまふ「聽きて悟れ。二 口に入るものは人を汚さず、然れど口より出づるものは、これ人を汚すなり」。三 爰に弟子たち御許に來りていふ「御言をききてバリサイ人の躓きたるを知り給ふか」。四 答へて言ひ給ふ「わが天の父の植ゑ給はぬものは、みな抜かれん。一四 彼らを捨ておけ、盲人を手引する盲人なり、盲人もし盲人を手引せば、二人とも穴に落ちん」。一五 ペテロ答へて言ふ「その譬を我らに解き給へ」。一六 イエス言ひ給ふ「なんぢらも今なほ悟なきか。一七 凡て口に入るものは腹にゆき、遂に厠に棄てらるる事を悟らぬか。一八 然れど口より出づるものは心より出づ、これ人を汚すものなり。一九 それ心より悪しき念いづ、即ち殺人・姦淫・淫行・竊盜・偽證・誹謗、二〇 これらは人を汚すものなり、然れど洗はぬ手にて食する事は人を汚さず」

二一 イエスここを去りてツロとシドンとの地方に往き給ふ。二二 視よ、カナンの女、その邊より出できたり、叫びて「主よ、ダビデの子よ、我を憫み給へ、わが娘、悪鬼につかれて甚く苦しむ」と言ふ。二三 されどイエス一言も答へ給はず。弟子たち來り請ひて言ふ「女を歸したまへ、我らの後より叫ぶなり」。二四 答へて言ひたまふ「我はイスラエルの家の失せたる羊のほかに遺されず」。二五 女きたり拜して言ふ「主よ、我を助けたまへ」。二六 答へて言ひたまふ「子供のパンをとりて、小狗に投げ與ふるは善からず」。二七 女いふ「然り、主よ、小狗も主人の食卓よりお

イ賽二九・一三 結三 徒一〇・一四、一五 ホ賽六〇・二二、六一 三・三一 羅一四・一四 提前 三・約一五・二 四・三、四 多一・一 太二三・一六、二四 路六・三九 又太一五・一一 哥前 六・二三 八 又太一五・一一 哥前 六・二三 九 可七・二〇(太二二) 加五・一九、二二 三・四 雅三・六 可七・二四、三〇 太一・二一 見よ 太九・二七 見よ 太四・二四 見よ 太一五・一七、一八 二太一五・一八、一九 路六・三九 六・二三



ツ(太九・二二) 一三一・二二 (徒九・二)  
 一三二 (徒九・二) 一三二 (徒九・二)  
 一三三 (徒九・二) 一三三 (徒九・二)  
 一三四 (徒九・二) 一三四 (徒九・二)  
 一三五 (徒九・二) 一三五 (徒九・二)  
 一三六 (徒九・二) 一三六 (徒九・二)  
 一三七 (徒九・二) 一三七 (徒九・二)  
 一三八 (徒九・二) 一三八 (徒九・二)  
 一三九 (徒九・二) 一三九 (徒九・二)  
 一四〇 (徒九・二) 一四〇 (徒九・二)  
 一四一 (徒九・二) 一四一 (徒九・二)  
 一四二 (徒九・二) 一四二 (徒九・二)  
 一四三 (徒九・二) 一四三 (徒九・二)  
 一四四 (徒九・二) 一四四 (徒九・二)  
 一四五 (徒九・二) 一四五 (徒九・二)  
 一四六 (徒九・二) 一四六 (徒九・二)  
 一四七 (徒九・二) 一四七 (徒九・二)  
 一四八 (徒九・二) 一四八 (徒九・二)  
 一四九 (徒九・二) 一四九 (徒九・二)  
 一五〇 (徒九・二) 一五〇 (徒九・二)  
 一五一 (徒九・二) 一五一 (徒九・二)  
 一五二 (徒九・二) 一五二 (徒九・二)  
 一五三 (徒九・二) 一五三 (徒九・二)  
 一五四 (徒九・二) 一五四 (徒九・二)  
 一五五 (徒九・二) 一五五 (徒九・二)  
 一五六 (徒九・二) 一五六 (徒九・二)  
 一五七 (徒九・二) 一五七 (徒九・二)  
 一五八 (徒九・二) 一五八 (徒九・二)  
 一五九 (徒九・二) 一五九 (徒九・二)  
 一六〇 (徒九・二) 一六〇 (徒九・二)  
 一六一 (徒九・二) 一六一 (徒九・二)  
 一六二 (徒九・二) 一六二 (徒九・二)  
 一六三 (徒九・二) 一六三 (徒九・二)  
 一六四 (徒九・二) 一六四 (徒九・二)  
 一六五 (徒九・二) 一六五 (徒九・二)  
 一六六 (徒九・二) 一六六 (徒九・二)  
 一六七 (徒九・二) 一六七 (徒九・二)  
 一六八 (徒九・二) 一六八 (徒九・二)  
 一六九 (徒九・二) 一六九 (徒九・二)  
 一七〇 (徒九・二) 一七〇 (徒九・二)  
 一七一 (徒九・二) 一七一 (徒九・二)  
 一七二 (徒九・二) 一七二 (徒九・二)  
 一七三 (徒九・二) 一七三 (徒九・二)  
 一七四 (徒九・二) 一七四 (徒九・二)  
 一七五 (徒九・二) 一七五 (徒九・二)  
 一七六 (徒九・二) 一七六 (徒九・二)  
 一七七 (徒九・二) 一七七 (徒九・二)  
 一七八 (徒九・二) 一七八 (徒九・二)  
 一七九 (徒九・二) 一七九 (徒九・二)  
 一八〇 (徒九・二) 一八〇 (徒九・二)  
 一八一 (徒九・二) 一八一 (徒九・二)  
 一八二 (徒九・二) 一八二 (徒九・二)  
 一八三 (徒九・二) 一八三 (徒九・二)  
 一八四 (徒九・二) 一八四 (徒九・二)  
 一八五 (徒九・二) 一八五 (徒九・二)  
 一八六 (徒九・二) 一八六 (徒九・二)  
 一八七 (徒九・二) 一八七 (徒九・二)  
 一八八 (徒九・二) 一八八 (徒九・二)  
 一八九 (徒九・二) 一八九 (徒九・二)  
 一九〇 (徒九・二) 一九〇 (徒九・二)  
 一九一 (徒九・二) 一九一 (徒九・二)  
 一九二 (徒九・二) 一九二 (徒九・二)  
 一九三 (徒九・二) 一九三 (徒九・二)  
 一九四 (徒九・二) 一九四 (徒九・二)  
 一九五 (徒九・二) 一九五 (徒九・二)  
 一九六 (徒九・二) 一九六 (徒九・二)  
 一九七 (徒九・二) 一九七 (徒九・二)  
 一九八 (徒九・二) 一九八 (徒九・二)  
 一九九 (徒九・二) 一九九 (徒九・二)  
 二〇〇 (徒九・二) 二〇〇 (徒九・二)

つる食脣を食ふなり』<sup>三八</sup>爰にイエス答へて言ひたまふ『をんなよ、<sup>三九</sup>汝の信仰は大なるかな、願のごとく汝になれ』娘この時より癒えたり。

<sup>三九</sup>イエス此處を去り、ガリラヤの海邊にいたり、而して山に登り、そこに坐し給ふ。三〇大なる群衆、跛者、不具、盲人、啞者および他の多くの者を連れ来りて、イエスの足下に置きたれば、<sup>三一</sup>醫し給へり。三二群衆は、啞者の物いひ、不具の癒え、跛者の歩み、盲人の見えたるを見て之を怪しみ、イスラエルの神を崇めたり。

<sup>三三</sup>イエス弟子たちを召して言ひ給ふ『われ此の群衆をあはれむ、既に三日われと偕にをりて食ふべき物なし。飢ゑたるままにて歸らしむるを好まず、恐くは途にて疲れ果てん』<sup>三四</sup>弟子たち言ふ『この寂しき地にて、斯く大なる群衆を飽かしむべき多くのパンを、何處より得べき』<sup>三五</sup>イエス言ひ給ふ『パン幾つあるか』<sup>三六</sup>彼らいふ

『七つ、また小き魚すこしあり』<sup>三七</sup>イエス群衆に命じて地に坐せしめ、<sup>三八</sup>七つのパンと魚とを取り、<sup>三九</sup>謝して之をさき弟子たちに與へ給へば、弟子たち之を群衆に與ふ。<sup>四〇</sup>凡ての人くらひて飽き、裂きたる餘を拾ひしに、<sup>四一</sup>七つの籠に満ちたり。<sup>四二</sup>食ひし者は、女と子供とを除きて四千人なりき。<sup>四三</sup>イエス群衆をかへし、舟に乗りてマガダンの地方に往き給へり。

**第一十六章**  
 一パリサイ人とサドカイ人と來りてイエスを試み、<sup>二</sup>天よりの徴を示さんことを請ふ。<sup>三</sup>答へて言ひたまふ『夕には汝ら「空あかき故に、晴ならん」と言ひ、<sup>四</sup>また朝には「そら赤くして曇る故に、今日は風雨ならん」と言ふ。なんぢら空の氣色を見分くることを知りて、<sup>五</sup>時の徴を見分くること能はぬか。

四  
 三  
 二  
 一

曲にして不義なる代は徴を求む、然れどヨナの徴の外に徴は與へられじ』斯て彼らを離れて去り給ひぬ。

五 弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携ふることを忘れたり。六 イエス言ひたまふ『慎みてパリサイ人と

サドカイ人とのパン種に心せよ』七 弟子たち互に『我らはパンを携へざりき』と語り合ふ。八 イエス之を知りて

言ひ給ふ『ああ信仰うすき者よ、何ぞパン無きことを語り合ふか。九 未だ悟らぬか、五つのパンを五千人に分ち

て、その餘を幾筐ひろひ、一〇 また七つのパンを四千人に分ちて、その餘を幾筐ひろひしかを覚えぬか。二 我が言

ひしはパンの事にあらぬを何ぞ悟らざる。唯パリサイ人とサドカイ人とのパンだねに心せよ』三 爰に弟子たちイ

エスの心せよと言ひ給ひしは、パンの種にはあらで、パリサイ人とサドカイ人との教なることを悟れり。

三三 イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問ひて言ひたまふ『人々は人の子を誰と言ふ

か』四 彼等いふ『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』五 彼らに言

ひたまふ『なんぢらは我を誰と言ふか』六 シモン・ペテロ答へて言ふ『なんぢはキリスト、活ける神の子なり』

七 イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我

が父なり。八 我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐の上に我が教會を建てん、黄泉の門はこれに勝たざ

るべし。九 われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は、天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解く

なり』一〇 爰にイエス己がキリストなる事を誰にも告ぐなと弟子たちを戒め給へり。

イ太一三・三三を見よ へ太一五・三四—三八 一八—二〇 七・一〇—一二 約 六三 徒一四・一五 二二 黙七・二  
ロ太一六・一一可八。 ト太一五・三七を見よ 一八—二〇 七・一〇—一二 約 六三 徒一四・一五 二二 黙七・二  
一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一  
ハ太六・三〇、八・三 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一  
六、一四・三一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一  
ニ太一四・一七—二二 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一  
ホ太一四・二〇を見よ 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一 一五路二二・一

オ二二一・二八 可八、九二二・三二 路一、九二二・三九を見よ  
 三二一九・二 路九、七二五、一八・三、コ太八・二〇を見よ  
 二二二・二七、二二三、二四・七、エ太二四・三〇、二五  
 九、二二・四〇、一七、約二・一九、三二、二六、六四  
 三、二〇・一八、一、マ(西三・二二) 可八・三八、一三  
 九、二七・六三 可ケ太一〇・三八を見よ、約二・二二 徒一、  
 一、撒前四・一六、一、撒後一・七 約二、二八 黙一・七  
 一、一、七 黙二、三、二〇・二二、一、キ太二六・三七 可五、  
 三、二二・二二(西) 三、二二・二五(西) 二、二四・二五  
 四、二二 羅二・六、ア(來二・九) ユ黙一・二六  
 哥後五・一〇 弗六、サ一・八 可九・二一、一、  
 八 提後四・一四 彼 八 路九・二八―三、ミ王下二・二一  
 六、シ可九・五 路九・三三、エ太三・一七 後一、  
 一七、一八、ヒ太三・一七を見よ

二二 この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・學者らより多くの  
 三 苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦へるべき事を示し始めたまふ。三 ペテロ、イエスを傍にひき戒め出でて言  
 四 ふ「主よ、然あらざれば、此の事なんぢに起らざるべし」三 イエス振り反りてペテロに言ひ給ふ「サタンよ、我が後  
 五 に退け、汝はわが贖物なり、汝は神のことを思はず、反つて人のことを思ふ」二四 爰にイエス弟子たちに言ひたま  
 六 ふ「人もし我に従ひ来らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて、我に従へ。二五 己が生命を救はんと思ふ者  
 七 は、これを失ひ、我がために、己が生命をうしなふ者は、之を得べし。二六 人、全世界を贏くとも、己が生命を損  
 八 せば、何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや。二七 人の子は父の榮光をもて、御使たちと共に來らん。そ  
 九 の時のおのの行爲に隨ひて報ゆべし。二八 誠に汝らに告ぐ、ここに立つ者のうちに、人の子のその國をもて來る  
 一〇 を見るまでは、死を味はぬ者どもあり」

### 第十七章

一 六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ、人を避けて高き山に登  
 二 りたまふ。二 斯て彼らの前にて其の狀かはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白く  
 三 なりぬ。三 視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。四 ペテロ差出でてイエスに言ふ「主よ、我ら  
 四 の此處に居るは善し。御意ならば我ここに三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリ  
 五 ヤの爲にせん」五 彼なほ語りをするとき、視よ、光れる雲、かれらを覆ふ。また雲より聲あり、曰く「これは我が

七六 愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聽け』六 弟子たち之を聞きて倒れ伏し、懼るること甚だし。七 イエスその  
 八 許にきたり之に觸りて『起きよ、懼るな』と言ひ給へば、八 彼ら目を擧げしに、イエス一人の他は誰も見えざり  
 き。

九 山を下るとき、イエス彼らに命じて言ひたまふ『人の子の、死人の中より甦へるまでは、見たることを誰  
 二〇 にも語るな』一〇 弟子たち問ひて言ふ『さらば、エリヤ先づ來るべしと學者らの言ふは何ぞ』二 答へて言ひたまふ  
 三 『實にエリヤ來りて萬の事をあらためん。三 我なんぢらに告ぐ、エリヤは既に來り。然れど人々これを知ら  
 四 ず、反つて心のままに待へり。斯のごとく人の子もまた人々より苦しめらるべし』三 爰に弟子たちバブテスマの  
 五 ヨハネを指して言ひ給ひしなるを悟れり。

二四 一四 かれら群衆の許に到りしとき、或人、御許にきたり跪ぎて言ふ、『主よ、わが子を憫みたまへ。癩癩に  
 二六 て難み、しばしば火の中に、しばしば水の中に倒るるなり。一六 之を御弟子たちに連れ來りしに、醫すこと能はざ  
 二七 りき』一七 イエス答へて言ひ給ふ『ああ信なき曲れる代なるかな、我いつまで汝らと偕にをらん、何時まで汝らを  
 二八 忍ばん。その子を我に連れきたれ』一八 遂にイエスこれを禁め給へば、悪鬼いでてその子の時より癒えたり。一九  
 三〇 爰に弟子たち竊にイエスに來りて言ふ『われらは何故に逐ひ出し得ざりしか』二〇 彼らに言ひ給ふ『なんぢら信仰  
 三二 うすき故なり。誠に汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に『此處より彼處に移れ』と言ふとも  
 三三 移らん、斯て汝ら能はぬこと無かるべし』（二二）

イ中一八・一五、一九 一八、一〇・一〇、へ太一七・二二、二二 (太一六・二四) 三七一四二  
 律三・二二、二三來 一八) 太八二〇を見よ) 又七一七・九、二二太 三太四二四 可一一・二二、二四 四〇  
 一二・二五 二太一四・二七を見よ 太一六・二二を見よ 八二〇を見よ ワ(哥後一一・二) 路一七・六  
 口彼後一・一八 太九一・三 可九・九 太八・四を見よ ル一四一・九 可九 太一三・三一 路一 太一七・九(哥前  
 一) 一三 太一・一四を見よ 一四一・二八 路九 七・六 三三二)

ソ二二、二三 可九・三 太一六・二一を見よ 羅一三・六、七 哥前八・一三三  
 〇一三二 路九・四 十出三〇・一三一 一 太五・二九、三〇、 井一・五 可九・三三  
 四、四五 五、三八・二六 一八・六、九 可九・ 一三七 路九・四六  
 ツ太一七・九、一二 太 一 羅一三・七 四二・四七 路一七 一四八  
 八・二〇を見よ ム太二二・二七、二二 一、二、約六・六一 ノ詩一三二・二 太一 才太二〇・二六、二七、  
 九二四 可一〇・ 二三・一一、一二 一・一九 提前四・一 四七  
 一五 路一八・一七 ク可九・四二 路一七・ 一 太五・三〇 可九・四 二太五・二二を見よ  
 (哥前一四・二〇 被 二(哥前八・一二) 三 太一七・二七を見よ フ太一七・二七を見よ  
 前二・二) ヤ太一七・二七を見よ マ路一七・一 哥前一 可太五・二九 可九・

三三 彼らガリラヤに集ひをる時、イエス言ひたまふ「人の子は人の手に付され、  
 人々は之を殺さん、斯て三日めに甦へるべし」弟子たち甚く悲しめり。

二四 彼らカペナウムに到りしとき、納金を集むる者ども、ペテロに來りて言ふ「なんぢらの師は納金を納めぬか」  
 二五 ペテロ「納む」と言ひ、頓て家に入りしに、逸速くイエス言ひ給ふ「シモンいかに思ふか、世の王たちは税または貢を誰より取るか、己が子よりか、他の者よりか」  
 二六 ペテロ言ふ「ほかの者より」イエス言ひ給ふ「されば子は自由なり。されど彼らを躓かせぬ爲に、海に往きて釣をたれ、初に上る魚をとれ、其の口をひらかば銀貨一つを得ん、それを取りて我と汝との爲に納めよ」

### 第一八章

一 そのとき弟子たち、イエスに來りて言ふ「しからは天國にて大なるは誰か」  
 二 イエス幼兒を呼び、彼らの中に置きて言ひ給ふ、  
 三 「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻へりて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ。  
 四 されば誰にても此の幼兒のごとく己を卑うする者は、これ天國にて大なる者なり。  
 五 また我が名のために、斯のごとき一人の幼兒を受くる者は、我を受くるなり。  
 六 然れど我を信する此の小さな者の一人を躓かする者は、寧ろ大なる礮臼を頸に懸けられ、海の深處に沈められんかた益なり。  
 七 この世は躓物あるによりて禍害なるかな。  
 八 躓物は必ず來らん、されど躓物を來らする人は禍害なるかな。  
 九 もし汝の手、または足、なんぢを躓かせば、切りて棄てよ。  
 十 不具または蹇跛にて生命に入るは、兩手・兩足ありて永遠の火に投げ入れらるるよりも勝るなり。  
 十一 もし汝の眼、なんぢを躓かせば抜きて棄てよ。  
 十二 片眼にて生命に入るは、兩眼ありて火のゲヘ

〇 ナに投げ入れらるるよりも勝るなり。一〇 汝ら慎みて此の小さき者の一人をも侮るな。我なんぢらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり。\*  
 二 汝等いかに思ふか、百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹まよはば、九十九匹を山に遺しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか。三 もし之を見出さば、誠に汝らに告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん。四 斯のごとく此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意にあらず。

一五 もし汝の兄弟、罪を犯さば、往きてただ彼とのみ、相對して諫めよ。もし聽かば其の兄弟を得たるなり。  
 一六 もし聽かずば一人・二人を伴ひ往け、これ二三の證人の口に由りて、凡ての事の慥められん爲なり。一七 もし彼等にも聽かずば、教會に告げよ。もし教會にも聽かずば、之を異邦人または取税人のごとき者とすべし。一八 誠に汝らに告ぐ、すべて汝らが地にて縛ぐ所は天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり。一九 また誠に汝らに告ぐ、もし汝等のうち二人、何にても求むる事につき地にて心を一つにせば、天にいます我が父は之を成し給ふべし。二〇 二三人わが名によりて集る所には、我もその中に在るなり』

二 爰にペテロ御許に來りて言ふ『主よ、わが兄弟われに對して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』  
 三 イエス言ひたまふ『否われ「七度まで」とは言はず「七十倍を七十倍するまで」と言ふなり。三三 この故に天國はその家來どもと計算をなさんとする王のごとし。三四 計算を始めしとき一萬タラントの負債ある家來つれ來られしが、二五 償ひ方なかりしかば、其の主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを賣りて償ふことを命じたるに、

イ創四八・一六 詩三〇 王上一〇・八路一・四一七  
 四七・九一・一一 一九 哥前二・三・二 二 提前二・四  
 一二 但六・二二 徒 二 黙二二・四 來 亦利一九・二七 路二  
 一二・二五 來一 九・二四 七三・四 加六  
 一四 黙八・二 八一 二一 四 路一五 撒後三・二五 雅五  
 一九・二〇 一 甲一九・二五 約八 一七 哥後二・三・一 提前五・一九 來一 〇・二三  
 ト(哥前六・一一八) ル太一八・一五 タ一タラントは約二 千川 王下五・五、二 三、二三・三三 帖 三、三九  
 チ(撒後三・六、一四) ヲ路一七・四 ワ(創四・二四) カ太一三・二四を見よ 三、三九  
 リ太一六・一九 約二 〇・二三 ヲ太二五・一九 レ路七・四二  
 ヌ大七・七を見よ

ツ大八・二を見よ  
 一五 路七・四一、 一二・一四可一一、  
 一〇・三五、二〇・ 二五  
 五錢 太二〇・二、 二四 約六・七、 ラ太六・一五 雅二・  
 一二・二二・二九 一二・五 一三  
 可六・三七、一二・ ナ儂二一・一三 太六・ ム一一九 可一〇・一 才太五・三一  
 一・二二  
 ウ約一〇・四〇  
 井太四・二五を見よ  
 ノ太四・二三を見よ  
 マ哥前六・一六、七、  
 二  
 ク創一・二七、五・二 ケ申二四・一 太五・三  
 ヤ創二・二四 弗五・ 一

二七六 その家來ひれ伏し、拜して言ふ「寛くし給へ、さらば悉とく償はん」三七 その家來の主人、あはれみて之を解  
 二八 き、その負債を免したり。二八 然るに其の家來いでて、己より百デナリを負ひたる一人の同僚にあひ、之をとら  
 三〇九 へ、喉を締めて言ふ「負債を償へ」二九 その同僚ひれ伏し、願ひて「寛くし給へ、さらば償はん」と言へど、三〇  
 三二 肯はずして往き、その負債を償ふまで之を獄に入れたり。三二 同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし  
 三三 凡ての事をその主人に告ぐ。三三 ここに主人かれを呼び出して言ふ「悪しき家來よ、なんぢ願ひしによりて、かの  
 三三 負債をことごとく免せり。三三 わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらずや」三四 斯くその主人、怒  
 三三 りて、負債をことごとく償ふまで彼を獄卒に付せり。三五 もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父も  
 三三 亦なんぢらに斯のごとく爲し給ふべし』

### 第一九章

一 イエスこれらの言を語り終へてガリラヤを去り、ヨルダンの彼方なるユダヤの地方に來り給ひし  
 二 に、二 大なる群衆、從ひたれば、此處にて彼らを醫し給へり。  
 三 パリサイ人ら來り、イエスを試みて言ふ「何の故にかかはらず、人その妻を出すは可きか」四 答へて言ひ  
 五 たまふ「人を造り給ひしもの、元始より之を男と女とに造り、而して、五「斯る故に人は父母を離れ、その妻に合  
 六 ひて、二人のもの一體となるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬか。六 然れば、はや二人にはあらず、一體なり。  
 七 この故に神の合せ給ひし者は人これを離すべからず」七 彼らイエスに言ふ「さらば何故モーセは離縁狀を與へて  
 八 出すことを命じたるか」八 彼らに言ひ給ふ「モーセは汝らの心、無情によりて妻を出すことを許したり。然れど

九 元始より然にはあらぬなり。九 われ汝らに告ぐ、おほよそ淫行の故ならで其の妻をいだし、他に娶る者は姦淫を

二〇 行ふなり。一〇 弟子たちイエスに言ふ「人もし妻のことに於て斯のごとくば、娶らざるに如かず」二一 彼らに言ひた

三 まふ「凡ての人この言を受け容るるにはあらず、ただ授けられたる者のみなり。三二 それ生れながらの閻人あり、

人に爲られたる閻人あり、また天國のために自らなりたる閻人あり、之を受け容れうる者は受け容るべし」

三三 爰に人々イエスの手をおきて祈り給はんことを望みて、幼兒らを連れ來りしに、弟子たち禁めたれば、

三四 イエス言ひたまふ「幼兒らを許せ、我に來るを止むな、天國は斯のごとき者の國なり」三五 斯て手を彼らの上に

おきて此處を去り給へり。  
二七 視よ、或人みもとに來りて言ふ「師よ、われ永遠の生命をうる爲には如何なる善き事を爲すべきか」二七 イ

二八 エス言ひたまふ「善き事につきて何ぞ我に問ふか、善き者は唯一ひとりのみ。汝もし生命に入らんと思はば誠命を

守れ」二八 彼いふ「孰れを」イエス言ひたまふ「殺すなかれ」「盗むなかれ」「偽證を立つる勿

二九 れ」二九 父と母とを敬へ」また「己のごとく汝の隣を愛すべし」三〇 その若者いふ「我みな之を守れり、なほ何を缺

三 かくか」三二 イエス言ひたまふ「なんぢ若し全からんと思はば、往きて汝の所有を賣りて貧しき者に施せ、さらば財

三 寶を天に得ん。かつ來りて我に従へ」三三 この言をききて若者、悲しみつつ去りぬ。大なる資産を有てる故なり。

三三 イエス弟子たちに言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、富める者の天國に入るは難し。三四 復なんぢらに告ぐ、

富める者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し」三五 弟子たち之をきき、甚だしく驚きて言

イ太五・三二 路一六・二 哥前七・三三、三四、ヘ太一八・三可一〇、チ一六一・二九可一〇、ヌ利一八・五、尼九・ヲ太一五・四、カ路一二・三三、一八、タ太一三・二二、可一

一八 哥前七・一〇、九・五、一四 路一八・一六、二七・三〇 路一、二九 結二〇・二二、ワ利一九・一八、太二、二・三九 羅一三・九、二・三三 一四 雅二・八、加五・一四 雅二・八、ヨ太六・二〇、レ可一〇・二五 路一、ハ太一三・一一を見よ、八・二五 一七、ト太五・三を見よ、リ太二五・四六を見よ、申五・二六 一三〇、(大七・二二)



ツ制一八・二四 伯四 一四・三六  
 二・二耶三二・一七 ツ太四・二〇、二二路  
 亞八・六、二七可一 五・一一  
 〇・二七 路一・三 太三・五・三一  
 七、一八・二七(太 九路三三・三〇 哥前  
 六・二 默三・二一、 (太六・三三)  
 四・四、一一・一六、 ム太二〇・一六、二一  
 二〇・四、二二・五 三三、三三可一〇  
 ラ可一〇・二九、三〇 三三一路三三・三〇  
 路一八・二九、三〇 ウ太三三・二四を見よ ヤ太一八・二八を見よ  
 井太二一・二八、三三 マ(雅一・一一)  
 ノ太一八・二八を見よ ケ太三三・二二、三六  
 オ利一九・二三 五〇  
 ク路八・三

二六 ふ「さらば誰か救はるることを得ん」二六 イエス彼らに目を注めて言ひ給ふ「これは人に能はねど神は凡ての事を  
 二七 なし得るなり」二七 爰にペテロ答へて言ふ「視よ、われら一切をすてて汝に従へり、然れば何をすべきか」二八 イエ  
 ス彼らに言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、世あらたまりて人の子その榮光の座位に坐するとき、我に従へる汝等  
 二九 もまた十二の座位に坐してイスラエルの十二の族を審かん。三〇 また凡そ我が名のために或は家、或は兄弟、ある  
 三〇 ひは姉妹、あるひは父、或は母、或は子、或は田畑を棄つる者は數倍を受け、また永遠の生命を嗣がん。三〇 然れ  
 ど多くの先なる者後に、後なる者先になるべし。

第二章

一 天國は勞動人を葡萄園に雇ふために、朝早く出でたる主人のごとし。二 一日、一デナリの約束を  
 二 なして、勞動人どもを葡萄園に遣す。三 また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て 四「な  
 五 んぢらも葡萄園に往け、相當のものを與へん」といへば、彼らも往く。五 十二時頃と三時頃とに復いでて前のご  
 七六 とくす。六 五時頃また出でしに、なほ立つ者等のあるを見ていふ「何ゆゑ終日ここに空しく立つか」七 かれら言  
 八 ふ「たれも我らを雇はぬ故なり」主人いふ「なんぢらも葡萄園に往け」八 夕になりて葡萄園の主人その家司に言  
 九 ふ「勞動人を呼びて、後の者より始め先の者にまで賃銀をはらへ」九 斯て五時ごろに雇はれしもの來りて、おの  
 二〇 おの一デナリを受く。一〇 先の者きたりて、多く受くるならんと思ひしに、之も亦おのおの一デナリを受く。二 受  
 二 けしとき、家主にむかひ呟きて言ふ、二三「この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の勞と暑さを  
 三 忍びたる我らと均しく、之を遇へり」二三 主人こたへて其の一人に言ふ「友よ、我なんぢに不正をなさず、汝は我



ウ二九一三四可一〇ノ太二〇・三一  
 ・四六一五二(太九 〇一―九 可一―一・一  
 ・二七一三一 路一 一―一〇 路一九・二  
 ・八三五―四三) 九一三八  
 井太九・二七を見よ ク強一四・四太二四・  
 三、二六・三〇 可 約八・二 徒一・二二  
 一、一、一三・三、 ヤ四一九 約一三・一  
 一四・二六 路一九・ 二一―一五  
 二九、三七、二一、 マ賢六二・二一 亞九・  
 三七、二二・三九 九  
 三、二六・三〇 可 約八・二 徒一・二二  
 ケ(王下九・二二三  
 フ太九・二七を見よ  
 コ詩一八・二六 可  
 一、一、九  
 エ(路二・二四)  
 七、四〇、九・二七  
 徒三・二二―二六、  
 七、三七(太二二・二  
 六約一・二二―二五)  
 六約一・二二―二五)  
 サ一、二一―一六 可一―  
 九、四五―四七二  
 ユ利一・二四、五・七、  
 一、二、八

二九 彼らエリコを出づるとき、大なる群衆イエスに従へり。三〇 視よ、二人の盲人、路の傍らに坐しをりしが、

三一 イエスの過ぎ給ふことを聞き、叫びて言ふ『主よ、ダビデの子よ、我らを憫みたまへ』三二 群衆かれらを禁めて黙

三三 さしめんと爲たれど、愈々叫びて言ふ『主よ、ダビデの子よ、我らを憫み給へ』三三 イエス立ち止り、彼らと呼び

三四 て言ひ給ふ『わが汝らに何を爲さんことを望むか』三三 彼ら言ふ『主よ、目の開かれんことなり』三四 イエスいたく

三三 憫みて彼らの目に觸り給へば、直ちに物見ることを得て、イエスに従へり。

第二章

一 彼らエルサレムに近づき、オリブ山の邊なるベテパゲに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんと

二 して言ひ給ふ、二『向の村にゆけ、頓て繋ぎたる驢馬のその子とともに在るを見ん、解きて我に牽き

三 きたれ。三 誰かもし汝らに何とか言はば「主の用なり」と言へ、さらば直ちに之を遣さん』四 此の事の起りしは

五 預言者によりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、五『シオンの娘に告げよ、「視よ、汝の王、なんぢに來り

六 給ふ。柔和にして驢馬に乗り、軛を負ふ驢馬の子に乗りて』六 弟子たち往きて、イエスの命じ給へる如くして、

七 驢馬とその子とを牽ききたり、己が衣をその上におきたれば、イエス之に乗りたまふ。八 群衆の多くはその衣

九 を途にしき、或者は樹の枝を伐りて途に敷く。九 かつ前にゆき後にしたがふ群衆よばはりて言ふ、『ダビデの子に

一〇 \*ホサナ、讚むべきかな、主の御名によりて來る者。いと高き處にてホサナ』一〇 遂にエルサレムに入り給へば、都

一一 擧りて騒立ちて言ふ『これは誰なるぞ』一二 群衆いふ『これガリラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり』

一二 イエス宮に入り、その内なる凡ての賣買する者を逐ひいだし、兩替する者の臺・鴿を賣る者の腰掛を倒し

二三 と言ひ給ふ、「言わが家は祈の家と稱へらるべし」と録されたるに汝らは之を強盜の巢となす」二四 宮にて盲人・跛者ども御許に來りたれば、之を醫したまへり。二五 祭司長・學者らイエスの爲し給へる不思議なる業と宮にて呼はり「ダビデの子にホサナ」と言ひをる子等とを見、憤ほりて、二六 イエスに言ふ「なんぢ彼らの言ふところを聞かか」イエス言ひ給ふ「然り」嬰兒・乳兒の口に讚美を備へ給へり」とあるを未だ讀まぬか」二七 遂に彼らを離れ、都を出でてベタニヤにゆき、其處に宿り給ふ。

二八 朝早く、都にかへる時イエス飢ゑたまふ。一九 路の傍なる一もとの無花果の樹を見て、その下に到り給ひしに、葉のほかは何をも見出さず、之に對ひて「今より後いつまでも果を結ばざれ」と言ひ給へば、無花果の樹たちどころに枯れたり。二〇 弟子たち之を見、怪しみて言ふ、「無花果の樹の斯く立刻に枯れたるは何ぞや」二一 イエス答へて言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、もし汝ら信仰ありて疑はずば、音に此の無花果の樹にありし如きことを爲し得るのみならず、此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも亦成るべし。二三 かつ祈るとき何にても信じて求めば、ことごとく得べし」

二四 宮に到りて教へ給ふとき、祭司長・民の長老ら御許に來りて言ふ「何の權威をもて此等の事をなすか、誰がこの權威を授けしか」二五 イエス答へて言ひたまふ「我も一言なんぢらに問はん、若し夫を告げなば、我もまた何の權威をもて此等のことを爲すかを告げん。二六 ヨハネのバプテスマは何處よりぞ、天よりか、人よりか」かれら互に論じて言ふ「もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざりし」と言はん。二六 もし人よりと言はんか、人みな

イ 五五六・七 へ太二六・六 可一一  
 口 耶七・一一 一・二二、二二、二二 可一  
 八 大四・二三を見よ 一四・三 路一九・ 二二二、二四、二二  
 二 大九・二七を見よ 二九、二四、五〇 〇一、二四 又 太七・七 雅五・一  
 水 詩八・二 約一一、二、一八、 七 太一七・二〇 可一 六 約三・三二、 七 出二・二四 路二二 六・二〇  
 一・二三 路一七・ 五・一四 二・二四 徒四・七、  
 ヨ 路七・二九、三四 三三  
 夕 路七・五〇 三三  
 レ 太三・一一、一二 三三  
 ソ 路三・一二 三三  
 カ 太二〇・一、二二、

ツ三三十四六可二二 ナ詩八〇八一六 井歌八・二二・二二  
 ・一一二 路二〇 賽五・一一七 ノ太三三三 七・五二 撒前二・  
 九・一九 ラ賽五・二 才代下二四・二二、三 一五來一・三六、  
 太三三〇・二、二二、 ム賽五・二 六・一六 尼九・二 三三七  
 二八 ウ太二五・一四 六 太五・二二、二二 ク太三三・四 二七、二八  
 三・三四・三七 徒 ヤ詩二・八 來一・二二 ケ太二六・五〇 可一  
 二・九 路三〇・一六 コ詩一・八・二二、二  
 太八・一一、一二 三賽二八・一六  
 太二・三・四六、一五 徒四・一一 弗二・  
 六・三四、二七、一 五四 約一・八・一二 七、一八・六、二  
 約一・五三 徒四・ 徒二・二三 フ太二一・四三 可一 八・二八  
 二〇 彼前二・四一 八 (羅九・三三)

二七 ヨハネを預言者と認むれば、我らは群衆を恐る」ニモ遂に答へて「知らず」と言へり。イエスもまた言ひたまふ

二八 「我も何の權威をもて此等のことを爲すか汝らに告げじ。ニハなんぢら如何に思ふか、或人ふたりの子ありしが、

二九 その兄にゆきて言ふ「子よ、今日、葡萄園に往きて働け」ニ九答へて「主よ、我ゆかん」と言ひて終に往かず。

三〇 また弟にゆきて同じやうに言ひしに、答へて「往かじ」と言ひたれど、後くいて往きたり。三〇この二人のうち

孰か父の意を爲しし」彼らいふ「後の者なり」イエス言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、取税人と遊女とは汝らに

先だちて神の國に入るなり。三三それヨハネ義の道をもて來りしに、汝らは彼を信ぜず、取税人と遊女とは信じた

三三 然るに汝らは之を見し後もなほ悔改めずして信ぜざりき。

三三 また一つの譬を聽け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を堀り、槽を建て、農夫ども

三三 に貸して遠く旅立せり。三四 果期ちかづきたれば、その果を受け取らんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、三五 農

三三 夫どもその僕らを執へて一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石にて撃てり。三六 復ほかの僕らを前よりも多

三三 く遣ししに、之をも同じやうに遇へり。三七 わが子は敬ふならん」と言ひて、遂にその子を遣ししに、三八 農夫ども

三三 此の子を見て互に言ふ「これは世嗣なり、いざ殺して、その嗣業を取らん」三九 斯て之をとらへ葡萄園の外に逐ひ

三三 出して殺せり。四〇 さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を爲さんか」四一 かれら言ふ「その悪人どもを

三三 飽くまで滅し、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し與ふべし」四二 イエス言ひたまふ「聖書

三三 に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきな

三「り」とあるを汝ら未だ讀まぬか。四三この故に汝らに告ぐ、汝らは神の國をとられ、其の果を結ぶ國人は、之を與へらるべし。四四この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうへに倒るれば、其の人を微塵とせん」四五祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己らを指して語り給へるを悟り、四六イエスを執へんと思へど群衆を恐れたり、群衆かれを預言者とするに因る。

第二二章

一イエスマた譬をもて答へて言ひ給ふ、二「天國は己が子のために婚筵を設くる王のごとし。三婚筵に招きおきたる人々を迎へんとて僕どもを遣ししに、來るを肯はず。四復ほかの僕どもを遣すとて言ふ「招きたる人々に告げよ、視よ、晝餐は既に備りたり。我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備りたれば婚筵に來れと」五然るに人々顧みずして、或者は己が畑に、或者は己が商賣に往けり。六また他の者は僕どもを執へて、辱しめ、かつ殺したれば、七王、怒りて軍勢を遣し、かの兇行者を滅して、其の町を焼きたり。八斯て僕どもに言ふ「婚筵は既に備りたれど、招きたる者どもは相應しからず。九然れば汝ら街に往きて遇ふほどの者を婚筵に招け」一〇僕ども途に出でて善きも悪しきも遇ふほどの者をみな集めたれば、婚禮の席は客にて満てり。一一王、客を見んとて入り來り、一人の禮服を著けぬ者あるを見て、一二之に言ふ「友よ、如何なれば禮服を著けずして此處に入りたるか」かれ黙しむたり。一三ここに王、侍者らに言ふ「その手足を縛りて外の暗黒に投げいだせ、其處にて哀哭・切齒することあらん」一四それ招かるる者は多かれど、選ばるる者は少し」一五爰にパリサイ人ら出でて如何してかイエスを言の繻に係けんと相議り、一六その弟子らをへロデ黨の者ども

イ太八・一二  
ホ太二二・二六  
リ黙一九・七—九  
カ徒二三・四六—六一  
六四・六 亞三・三  
一・二〇 黙一七・ 一  
三(可八・一五)

口太八・一四、一五 編  
ヘ太二二・一—を見よ  
又太二二・三四  
〇・一— 路二〇・  
一五 加三・二七  
夕太二〇・一三、二六  
一五 一四  
二一—二二 可一

九・三三 彼前二・八  
ト二二・一四(路一四・  
ル太二二・三六  
三五 黙三・四)  
弗四・二四 西三・  
五〇  
レ太八・一二を見よ  
二一—二二 一七 路  
二〇・二〇—二六

八但二・四四、四五  
一六一—二四)  
ヨ(王下)一〇、一二 詩  
一〇、一二 黙三・  
四、五、一八、一六、  
ツ太二四・二二 彼後  
二〇・二〇—二六

二路二〇・一九  
チ太二三・二四を見よ  
ワ母後一〇・四、五  
一三三・九、一六 鑿

ナ太一七・二五 井太一八・二八を見よ  
 ラ路二・一、三・一 約 ノ可二・一七 路二 〇・二七・四〇  
 一九・二二、二五 〇・二五 羅一三・七 ヤ太三・七を見よ  
 ム大九・四 オ可二・二二 マ申二五・五、六 エ約三三・二  
 ウ太一七・二五 ク二二・三三 可二二 ケ(約二〇・九) テ出三・六、一六 徒 〇・二五・二八  
 七・三二 ア太七・二八を見よ  
 キ太三・七を見よ  
 ユ路七・三〇、一〇  
 二五、一一・四五、  
 四六、五二、一四、  
 三多三・一三

七 七 と共に遣して言はしむ『師よ、我らは知る、なんぢは眞にして眞をもて神の道を教へ、かつ誰をも憚りたまふ事  
 八 なし、人の外貌を見給はぬ故なり。一七 されば我らに告げたまへ、貢をカイザルに納むるは可きか、悪しきか、如  
 九 何に思ひたまふ』一八 イエスその邪曲なるを知りて言ひたまふ『偽善者よ、なんぞ我を試むるか。一九 貢の金を我に  
 一〇 見せよ』彼らデナリ一つを持ち来る。二〇 イエス言ひ給ふ『これは誰の像、たれの號なるか』二一 彼ら言ふ『カイザ  
 二二 ルのなり』ここに彼らに言ひ給ふ『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』二三 彼ら之を聞きて  
 二三 怪しみ、イエスを離れて去り往けり。

二四 復活なしといふサドカイ人ら、その日、みもとに來り問ひて言ふ、二四 『師よ、モーセは一人もし子なくして  
 二五 死なば、其の兄弟かれの妻を娶りて兄弟のために世嗣を擧ぐべし』と云へり。二五 我らの中に七人の兄弟ありし  
 二六 が、兄めとりて死に、世嗣なくして其の妻を弟に遺したり。二六 その二、その三より、その七まで皆かくの如く爲  
 二七 し、二七 最後にその女も死にたり。二八 されば復活の時その女は七人のうち誰の妻たるべきか、彼ら皆これを妻とし  
 二九 たればなり』二九 イエス答へて言ひ給ふ『なんぢら聖書をも神の能力をも知らぬ故に誤れり。三〇 それ人よみがへり  
 三〇 の時は娶らず、嫁がず、天に在る御使たちの如し。三一 死人の復活に就きては神なんぢらに告げて、三二 我はアブラ  
 三二 ハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり』と言ひ給へることを未だ讀まぬか。神は死にたる者の神にあらず、生  
 三三 ける者の神なり』三三 群衆これを聞きて其の教に驚けり。

三四 パリサイ人ら、イエスのサドカイ人らを黙さしめ給ひしことを聞きて相集り、三五 その中なる一人の教法  
 マタイ傳 二二・一七—三五 四七

師、イエスを試むる爲に問ふ、<sup>三六</sup>「師よ、律法のうち孰の誠命か大なる」<sup>三七</sup>イエス言ひ給ふ、「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし」<sup>三八</sup>これは大にして第一の誠命なり。<sup>三九</sup>第二もまた之にひとし「おのれの如く、なんぢの隣を愛すべし」<sup>四〇</sup>律法全體と預言者とは此の二つの誠命に據るなり」  
<sup>四一</sup>四一パリサイ人らの集りたる時、イエス彼らに問ひて言ひ給ふ、<sup>四二</sup>「なんぢらはキリストに就きて如何に思ふか、誰の子なるか」かれら言ふ、「ダビデの子なり」<sup>四三</sup>イエス言ひ給ふ、「さらばダビデ御靈に感じて何故かれを主と稱ふるか。曰く<sup>四四</sup>「主、わが主に言ひ給ふ、われ汝の敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」<sup>四五</sup>斯くダビデ彼を主と稱ふれば、争でその子ならんや」<sup>四六</sup>誰も一言だに答ふること能はず、その日より敢て復イエスに問ふ者なかりき。

### 第二三章

一爰にイエス群衆と弟子たちとに語りて言ひ給ふ、<sup>二</sup>「學者とパリサイ人とはモーセの座を占む。<sup>三</sup>されば凡てその言ふ所は、守りて行へ、されど、その所作には效ふな、彼らは言ふのみにて行はぬなり。<sup>四</sup>また重き荷を括りて人の肩にのせ、己は指にて之を動かさんともせず。<sup>五</sup>凡てその所作は人に見られん爲にするなり。即ちその經札を幅ひろくし、衣の總を大きくし、<sup>六</sup>饗宴の上席、會堂の上座、<sup>七</sup>市場にての敬禮、また人にラビと呼ぶることを好む。<sup>八</sup>されど汝らはラビの稱を受くな、汝らの師は一人にして、汝等はみな兄弟なり。<sup>九</sup>地にある者を父と呼ぶな、汝らの父は一人、すなはち天に在す者なり。<sup>一〇</sup>また導師の稱を受く

イ申六・五、一〇・一、ハ太七・一二を見よ  
 二、三〇・六、<sup>一</sup>羅一三・一〇、<sup>二</sup>提前ト詩一一〇・一、<sup>三</sup>徒二二・一、<sup>四</sup>可一三・三四、<sup>五</sup>路一八・四、<sup>六</sup>ヨ路一一・四三、<sup>七</sup>一四、<sup>八</sup>六、<sup>九</sup>四・三一、<sup>一〇</sup>六、<sup>一</sup>利一九・一八、<sup>二</sup>太一九・九、<sup>三</sup>羅一三・九、<sup>四</sup>二四・一四六、<sup>五</sup>可一一二、<sup>六</sup>三三・一三、<sup>七</sup>路二二・一、<sup>八</sup>一三、<sup>九</sup>哥前一一・五、<sup>一〇</sup>リ一・一七、<sup>一</sup>可一二・三、<sup>二</sup>テ太六・一、<sup>三</sup>五、<sup>四</sup>一六、<sup>五</sup>五、<sup>六</sup>一、<sup>七</sup>二、<sup>八</sup>一、<sup>九</sup>一、<sup>一〇</sup>一、<sup>一</sup>約四・七一、<sup>二</sup>一、<sup>三</sup>ホ太九・二七を見よ、<sup>四</sup>六・一九、<sup>五</sup>彼前三、<sup>六</sup>又喇七・六、<sup>七</sup>二五、<sup>八</sup>尼カ大九・二〇を見よ、<sup>九</sup>ヨ路一一・四三、<sup>一〇</sup>一四、<sup>一</sup>六、<sup>二</sup>五、<sup>三</sup>九、<sup>四</sup>二、<sup>五</sup>二六、<sup>六</sup>二、<sup>七</sup>二、<sup>八</sup>二、<sup>九</sup>二、<sup>一〇</sup>二、<sup>一</sup>タ太二三・八、<sup>二</sup>二六、<sup>三</sup>二五、<sup>四</sup>四九、<sup>五</sup>可九、<sup>六</sup>二、<sup>七</sup>二、<sup>八</sup>二、<sup>九</sup>二、<sup>一〇</sup>二、<sup>一</sup>レ雅三・一、<sup>二</sup>ソ門一六を見よ、<sup>三</sup>八、<sup>四</sup>九、<sup>五</sup>三、<sup>六</sup>二、<sup>七</sup>二、<sup>八</sup>二、<sup>九</sup>二、<sup>一〇</sup>二、<sup>一</sup>ツ太六・九、<sup>二</sup>七、<sup>三</sup>二



太二〇・二六を見よ 一三・四三  
 ナ路一四・一一、一八 ウ太五・二二を見よ ノ太一五・一四、二三  
 ・二四 井太二三・一三、一五、二四 マ王上八・二三 代下 四 花七・四九  
 ラ路二一・五二 二二・二五、二七、二八 オ太五・三三、三五 六・二 詩二六・八、二一・三 耶七・二 コ太二三・二六  
 ム徒二・一〇、六・五、九 九路二一・四二以ク(出三〇・二九) 一三三・一四 二・二三 何六・六 エ可七・四 路二一・三九  
 ケ詩一一・四 太五・三 米六・八 太九・一 三、一二・七

二二 な、汝らの導師はひとり、即ちキリストなり。二 汝等のうち大なる者は、汝らの役者とならん。三 凡そおのれを  
 高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり。

一三 禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、なんぢらは人の前に天國を閉して、自ら入らず、入らんと  
 する人の入るをも許さぬなり。〔一四〕一五 禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得  
 一四 んために海陸を経めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。

一六 禍害なるかな、盲目なる手引よ、なんぢらは言ふ「人もし宮を指して誓はば事なし、宮の黄金を指して誓  
 一七 はば果さざるべからず」と。一七 愚にして盲目なる者よ、黄金と黄金を聖ならしむる宮とは孰か貴き。一八 なんぢら  
 一八 又いふ「人もし祭壇を指して誓はば事なし、其の上の供物を指して誓はば果さざるべからず」と。一九 盲目なる者  
 二〇 よ、供物と供物を聖ならしむる祭壇とは孰か貴き。二〇 されば祭壇を指して誓ふ者は、祭壇と其の上の凡ての物と  
 二一 を指して誓ふなり。二一 宮を指して誓ふ者は、宮と其の内に住みたまふ者とを指して誓ふなり。二二 また天を指して  
 二二 誓ふ者は、神の御座と其の上の坐したまふ者とを指して誓ふなり。

二三 禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは薄荷・蒔蘿・クミンの十分の一を納めて、律法の中  
 二四 にて尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にす。然れど之は行ふべきものなり、而して彼もまた等閑にすべきもの  
 二四 ならず。二四 盲目なる手引よ、汝らは蚘を漉し出して駱駝を呑むなり。

二五 禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは酒杯と皿との外を潔くす、然れど内は貪慾と放縱と

三六にて満つるなり。二六盲目なるパリサイ人よ、汝まづ酒杯の内を潔めよ、然らば外も潔くなるべし。

二七禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども内

二八は死人の骨とさまざまの穢とにて満つ。二八斯のごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて

満つるなり。

二九禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、三〇「我ら

三一もし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに與せざりしものを」と。三一かく汝らは預言者を殺しし者

三二の子たるを自ら證す。三二なんぢら己が先祖の柩目を充せ。三三蛇よ、蝮の裔よ、なんぢら争でゲヘナの刑罰を避け

三四得んや。三四この故に視よ、我なんぢらに預言者・智者・學者らを遣さん、其の中の或者を殺し、十字架につ

三五け、或者を汝らの會堂にて鞭ち、町より町に逐ひ苦しめん。三五之によりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との

間にて汝らが殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上にて流したる正しき血は、皆なんぢらに報い來

三六らん。三六誠に汝らに告ぐ、これらの事はみな今の代に報い來るべし。

三七ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝雞のその雛を翼

三八の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと爲しこと幾度ぞや、然れど汝らは好まざりき。三八視よ、汝ら

三九の家は廢てられて汝らに遣らん。三九われ汝らに告ぐ、「讚むべきかな、主の名によりて來る者」と、汝等のいふ時

の至るまでは、今より我を見ざるべし』

イ太二三・一六 路一

徒七・五一、五二 撒

四

六(太二一・三四、

一一・四、一二・二

〇・二三)

レ得二・一二 詩一七

ツ詩一八・二六 太

一・四四 (徒二三・

前二・一五

へ太五・二二を見よ

三五)

四

カ三七・三九 路一

・八、九一・四 路

二二・九

三 路一一・四七、四八

二創一五・一六 撒前

ト三四・三六 路一

リ太一〇・一七を見よ

テ代下二四・二〇、二

一(亞一・一)

ヨ太五・一二を見よ

ソ王上九・七、九 耶

ハ太二三・三四、三七

ホ太三・七、一二・三

チ代下三六・一五、一

ル創四・八一、一〇

來

ワ太二四・三四(太一

夕申三二・一一

二二・五

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

一五一 可一三  
 一三三 路二一  
 五三三 太二一  
 ナ(太二二・二三)  
 路一九・四四

## 第二十四章

一 イエス宮を出でてゆき給ふとき、弟子たち宮の建造物を示さんとして御許に來りしに、ニ答へて言ひ給ふ「なんぢら此の一切の物を見ぬか。誠に汝らに告ぐ、此處に一つの石も崩されずしては石の上に遺らし」

三 オリーブ山に坐し給ひしとき、弟子たち窃に御許に來りて言ふ「われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又なんぢの來り給ふと世の終には、何の兆あるか」

四 イエス答へて言ひ給ふ「なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。五多くの者わが名を冒し來り「我はキリストなり」と言ひて多くの人を惑さん。六又なんぢら戦争と

七 戦争の噂とを聞かん、慎みて懼るな。斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。七即ち「民は民に、國

八 は國に逆ひて起たん」また處々に饑饉と地震とあらん、ハ此等はみな産の苦難の始なり。九そのとき人々なんぢ

〇 らを患難に付し、また殺さん。汝等わが名の爲に、もろもろの國人に憎まれん。〇その時おほくの人つまづき、

一 且たがひに付し、互に憎まん。二多くの偽預言者おこりて多くの人を惑さん。三また不法の増すによりて多くの

二 人の愛、冷かにならん。三然れど終まで耐へしものぶ者は救はるべし。四御國のこの福音は、もろもろの國人に證

三 をなさんため全世界に宣傳へられん、而して後、終は至るべし。

四 なんぢら預言者ダニエルによりて言はれたる「荒す惡むべき者」の聖なる處に立つを見ば(讀む者さとれ)

五 その時ユダヤに居る者どもは山に遁れよ。七屋の上に居る者はその家の物を取り出さんとして下るな。八畑に

六 をる者は上衣を取らんとて歸るな。九その日には孕りたる者と乳を哺する者とは禍害なるかな。一〇汝らの遁ぐる

二 ことの冬または安息日に起らぬやうに祈れ。三そのとき大なる患難あらん、世の創より今に至るまで斯る患難は  
 三 なく、また後にも無からん。三三その日もし少くせられずば、一人だに救はるる者なからん、されど選民の爲にそ  
 三 の日少くせらるべし。三三その時あるひは「視よ、キリスト此處にあり」或は「此處にあり」と言ふ者ありとも信  
 三 ずな。三四偽キリスト・偽預言者おこりて大なる徴と不思議とを現はし、爲し得べくば選民をも惑はさんと爲るな  
 三 五 視よ、預じめ之を汝らに告げおくなり。三六されば人もし汝らに「視よ、彼は荒野にあり」といふとも出で  
 三 七 往くな「視よ、彼は部屋にあり」と言ふとも信ずな。三七電光の東より出でて西にまで閃きわたる如く、人の子の  
 三 八 來るも亦然らん。三八それ死骸のある處には驚あつまらん。  
 三 九 これらの日の患難ののち直ちに日は暗く、月は光を發たず、星は空より隕ち、天の萬象、ふるひ動かかん。  
 三 〇 そのとき人の子の兆、天に現はれん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大なる榮光とをもて  
 三 一 天の雲に乗り來るを見ん。三二また彼は使たちを大なるラツパの聲とともに遣さん。使たちは天の此の極より彼の  
 三 二 極まで四方より選民を集めん。  
 三 三 無花果の樹よりの譬をまなべ、その枝すでに柔かくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。三三斯のごとく汝ら  
 三 四 も此等のすべての事を見れば人の子すでに近づきて門邊に到るを知れ。三四誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとごとく  
 三 五 成るまで、今の代は過ぎ往くまじ。三五天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ往くことなし。三六その日その時を

イ但二二・一 耳二・ 二太七・一五を見よ 又伯三九・三〇 結三三 三・一五 廢五・二 三 默一・七 五 (田一九・一六 二三、二三・三六)  
 二 太二四・二九 ホ約四・四八を見よ 九・一七 路一七・ 〇、八・九番一・一 ヨ太二四・三を見よ 來一二・一九) ラ可一三・三一 路二  
 默七・一四 (默一三・一三) 三七 五 徒二・二〇 默 夕太二三・四一 ソ申四・三三 默七・一 一・三三 彼後三、  
 口太二四・二四、三一 へ太二四・二二を見よ ル太二四・二一 六・一二、八・一二 レ察二七・二三 亞九 ツ太二四・二二を見よ 一〇(太五・一八)  
 (太二三・一四) 路 ト路一七・二四 ヲ察三四・四 默六・ 二 四 野前一五・五 ネ可一三・二九 雅五 ム可一三・三二(徒一  
 一八・七を見よ チ太八・二〇を見よ 二二三 結三三・七 一三 二 撒前四・一六 九 默三二・一〇 七)  
 ハ路一七・二三 リ太二四・三を見よ 耳二・一〇、三一、 カ但七・二三 太二四 默八・二、一一・一 ナ太一六・二八(一〇。

ウ制六・五、七・六一　ク路一七・三五  
 二三 路一七・二六　ヤ太二四・四三、四四、  
 井太二四・三を見よ　二五・一〇、一三可　マ路二二・三九　可一  
 ノ(太三二・一〇)　一三・三五 路二二　三三・三五 路三三  
 才太二四・三を見よ　三七・四〇、二二、ケ太二四・四二を見よ　テ太二五・二二、二三  
 三六 哥制一六・一　フ太二四・三を見よ  
 三 彼前五八　コ四五・五一　路一  
 路一六・一〇　ア太七・二四、一〇　メ約一八・三 徒二〇  
 ユ太一三・二四を見よ　一六、二五、二一九　ハ 黙四・五、八  
 一〇　サ(彼後三・四)　キ太八・一二を見よ　ミ弗五・二三、三〇  
 一〇、二二　一〇、二二、九(太三三　二二・二、九(太三三  
 一六、二四、四五、  
 二五・三一九  
 二二・二、一  
 二二・二、一  
 二二・二、一  
 二二・二、一

七 知る者なし、天の使たちも知らず子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。三七 ノアの時のごとく人の子の來るも然ある  
 八 べし。三八 曾て洪水の前ノア方舟に入る日までは、人々飲み食ひ、娶り嫁がせなどし、三九 洪水の來りて悉とく滅す  
 九 までには知らざりき、人の子の來るも然あるべし。四〇 その時ふたりの男、畑にをらん、一人は取られ、一人は遺  
 一〇 されん。四一 二人の女、磨碾きをらん、一人は取られ、一人は遺されん。四二 されば目を覺しをれ、汝らの主のき  
 二 たるは、何れの日なるかを知らざればなり。四三 汝等これを知れ、家主もし盗人いづれの時きたるかを知らば、目  
 三 をさまし居て、その家を穿たすまじ。四四 この故に汝らも備へをれ、人の子は思はぬ時に來ればなり。四五 主人が時  
 四 及びて食物を與へさする爲に、家の者のうへに立てたる忠實にして慧き僕は誰なるか。四六 主人のきたる時かく  
 五 爲し居るを見らるる僕は幸福なり。四七 誠に汝らに告ぐ、主人すべての所有を彼に掌どらすべし。四八 若しその僕、  
 六 悪しくして心のうちに主人は遅しと思ひて、四九 その同輩を拵きはじめ、酒徒らと飲食を共にせば、五〇 その僕の  
 七 主人おもはぬ日しらぬ時に來りて、五一 之を烈しく笞ち、その報を偽善者と同じうせん。其處にて哀哭・切齒する  
 八 ことあらん。

第二章

一 このとき天國は燈火を執りて、新郎を迎へに出づる十人の處女に比ふべし。二 その中の五人は愚  
 二 にして五人は慧し。三 愚なる者は燈火をとりて油を携へず、四 慧きものは油を器に入れて燈火とと  
 三 もに携へたり。五 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。六 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ」と呼は  
 四 る聲す。七 ここに處女みな起きてその燈火を整へたるに、八 愚なる者は慧きものに言ふ「なんぢらの油を分けあ

九 たへよ、我らの燈火きゆるなり」九 慧きもの答へて言ふ「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ賣るものに往  
 一〇 きて己がために買へ」一〇 彼ら買はんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備へをりし者どもは彼とともに婚禮に  
 一一 入り、而して門は閉せられたり。一二 その後の他の處女ども來りて「主よ、主よ、われらの爲にひらき給へ」と言  
 一二 ひしに、三 答へて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言へり。一三 されば目を覺しをれ、汝らは其の日  
 一四 その時を知らざるなり。

一四 また或人とほく旅立せんとして其の僕どもを呼び、之に己が所有を預くるが如し。一五 各人の能力に應じて  
 一六 或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントを與へ置きて旅立せり。一六 五タラントを受けし  
 一七 者は、直ちに往き、之をはたらかせて他に五タラントを贏け、一七 二タラントを受けし者も同じく他に二タラント  
 一八 を贏く。一八 然るに一タラントを受けし者は、往きて地を堀り、その主人の銀をかくし置けり。一九 久しうして後  
 二〇 の僕どもの主人きたりて、彼らと計算したるに、二〇 五タラントを受けし者は他に五タラントを持ちきたりて言  
 二一 ふ、「主よ、なんぢ我に五タラントを預けたりしが、視よ、他に五タラントを贏けたり」二一 主人いふ「宜いかな、  
 二二 善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歡喜に入れ」  
 二三 三 二タラントを受けし者も來りて言ふ「主よ、なんぢ我に二タラントを預けたりしが、視よ、他に二タラントを  
 二四 贏けたり」二三 主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌ど

イ 察五五・一  
 ロ 太二四・四二一四 詩五・五 哈一・二三 太二二・三三三 太二五・一五を見よ ヨ 太一八・二三 羅一 太二四・四七、二五 彼前一・八  
 四 西一・二二一一 約九・三一 羅八・九 二・七、一一、二九 弗四・二一 一・五一八 太二四・四五―四 三〇 詩一六・一一 番三  
 ハ 路一三・三五―四 太二四・四二―四四 弗四・二一 又 太一八・二四 路一 力 太二六・一五 彼前一 七、二五、二三 路一六・二〇―一二 詩一六・一一 番三  
 〇 路一三・二五 太七 七 路一九・二二―二 九・二三 九 太二一・三三 路 太二一・三三 一 二二 路一六・二〇―一二 詩一六・一一 番三  
 〇、一一 來 二二・二

ナ馬一・二三 太二〇 ム太一三・一二を見よ、ク(結三四・一七) 一・五〇 來四・三、ケヤ五・三路一・二・三、フ樂五八・七 結一八 一・三三 來一三・二一 ア提後一・一六、一七  
 ・二一、一二 (約登) ウ太八・一二を見よ ヤ太二五・四〇 路一 九・二六 歌一三、二 哥前六・九、一 七、一六 雅二・一 二 賽五八・七 結一八 來一三・三  
 五・三三 井太八・一二を見よ 九・三八 歌一七・一 八、一七・八 (約 五・五〇 加五・二一 五、一六 雅二・一 七、一六 雅二・一 サ箴一九・一七 太二  
 ラ太二二・一二、一三、ノ太一六・二七を見よ 四、一九・一六 一七・二四 弗一・四 雅二・五 (路一八、コ前一九・二一 三 伯 五、一六 〇・四二 來六・一〇  
 二四・四八、四九 オ太一九・二八 マ太一三・三五 路一 彼前一・二〇) 一八 來一・二四) 三二・三二 羅二二 テ(雅一・二七)

二四 らせん、汝の主人の歡喜にいれ」<sup>二四</sup> また一タラントを受けし者もきたりて言ふ「主よ、我はなんぢの嚴しき人に  
 二五 て、播かぬ處より刈り、散らさぬ處より斂むることを知るゆゑに、<sup>二五</sup> 懼れてゆき、汝のタラントを地に藏しおけ  
 二六 り。視よ、汝はなんぢの物を得たり」<sup>二六</sup> 主人こたへて言ふ「惡しく、かつ惰れる僕、わが播かぬ處より刈り、散  
 二七 らさぬ處より斂むることを知るか。<sup>二七</sup> さらば我が銀を銀行にあづけ置くべかりしなり、我きたりて利子とともに  
 二八 我が物をうけ取りしものを。<sup>二八</sup> 然れば彼のタラントを取りて十タラントを有てる人に與へよ。<sup>二九</sup> すべて有てる人  
 三〇 は、與へられて愈々豊ならん。然れど有たぬ者は、その有てる物をも取らるべし。<sup>三〇</sup> 而して此の無益なる僕を外  
 三二 の暗黒に逐ひいだせ、其處にて哀哭・切齒することあらん」  
 三三 人の子その榮光をもて、もろもろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位に坐せん。<sup>三三</sup> 斯て、その前にも  
 三四 ろもろの國人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、<sup>三三</sup> 羊をその右に、山羊をその左  
 三五 におかん。<sup>三四</sup> 爰に王その右にをる者どもに言はん「わが父に祝せられたる者よ、來りて世の創より汝等のために  
 三六 備へられたる國を嗣げ。<sup>三五</sup> なんぢら我が飢ゑしときに食はせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、  
 三七 裸なりしときに衣せ、病みしときに訪ひ、獄に在りしときに來りたればなり」<sup>三七</sup> 爰に正しき者ら答へて言はん  
 三八 「主よ、何時なんぢの飢ゑしを見て食はせ、渴きしを見て飲ませし。<sup>三八</sup> 何時なんぢの旅人なりしを見て宿らせ、  
 三九 裸なりしを見て衣せし。<sup>三九</sup> 何時なんぢの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」<sup>四〇</sup> 王こたへて言はん「ま  
 四一 ことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小き者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり」<sup>四一</sup> 斯てまた左

にをる者どもに言はん「詛はれたる者よ、我を離れて悪魔とその使らとのために備へられたる永久の火に入れ。

三 なんぢら我が飢ゑしときに食はせず、渴きしときに飲ませず、<sup>四三</sup>旅人なりしときに宿らせず、裸なりしときに

衣せず、病みまた獄に在りしときに訪はざればなり」<sup>四四</sup>爰に彼らも答へて言はん「主よ、いつ汝の飢ゑ、或は渴

き、或は旅人、あるひは裸、あるひは病み、或は獄に在りしを見て事へざりし」<sup>四五</sup>ここに王をたへて言はん「誠

になんぢらに告ぐ、此等のいと小きもの一人に爲さざりしは、即ち我になさざりしなり」と。<sup>四六</sup>斯て、これら

の者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん」

### 第二十六章

一 イエスこれらの言をみな語りて、弟子たちに言ひ給ふ、<sup>二</sup>「なんぢらの知ることく、二日の後  
は、<sup>三</sup>過越の祭なり、人の子は十字架につけられん爲に賣らるべし」<sup>四</sup>そのとき祭司長・民の長老  
ら、カヤパといふ大祭司の中庭に集り、<sup>五</sup>詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと相議りたれど、<sup>六</sup>又いふ「ま

つりの間は爲すべからず、恐らくは民の中に亂起らん」

六 イエス、ベタニヤにて癩病人シモン（シモン）の家に居給ふ時、<sup>七</sup>ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油を持ちて、

近づき來り食事の席に就き居給ふイエスの首に注げり。<sup>八</sup>弟子たち之を見て憤ほり言ふ「何故かく濫なる費を爲

すか。九之を多くの金に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを」<sup>一〇</sup>イエス之を知りて言ひたまふ「何ぞ

この女を惱すか、我に善き事をなせるなり。<sup>一一</sup>貧しき者は常に汝らと偕にをれど、我は常に偕に居らず。<sup>一二</sup>この

イ太七・二三 二九 徒二四・一五 四八 羅二七・五 約一一・五五、一二 四、二八 徒四・六  
ロ太四・一〇 黙一一 太一九・二九 約三 二二、六・二三 加 一、一三・一 太二六・五八、六九  
九 一五、一六、三六、 六・八 約五・一 一、一〇・四を見よ 可一四・五四、六六、 一五・一六 路一一  
ハ可九・四三、四八 路 四・一四、五・二四、 一等 又約一一・四七 一、二二、二二・五五  
一六・二四 猶七 六・二七、四〇、四 一、二一・五 可一四・一、 一、二二、二二・五五  
二、二二、二二・五五 約一八・一五（太二  
二 黙一一・二七 七、五四、一七・二、 二 路二二・一二 二、二二、二二・五五 七・二七）  
本（恒一一・二） 約五、 三 徒一三・四六、 一、一八・二三、一四、二 七・二七）  
ク太二二・一七を見よ

レ申一五・二一 可一 四・七 約一二・八

ワ太二二・二四を見よ 太二七・二四 六・一三 可一四・ 三一九（約二二・一 一八 路七・三七） 三九）



ツ約一九・四〇を見よ 三約六・七一、一 二・七一―一三 夕約一三・二六（約一  
 ツ可一四・九 二・四、一三・二六 ウ出二・二八―二〇 三・一八） 五・三 彼前一・一 四・二二―二五 路  
 ネ一四―一六 可一四 徒一・二六 井（約七・六、八） ヤ太二六・三二、五四、 〇、一一 哥前一・二七―二〇  
 ・一〇、一一 路三二 ヲ（徒二・二二 出ノ二〇―二四 可一 五・六 可九・一二 マ可一四・二一 哥前一・二七―二〇  
 ・三一六 二二・三二） 四・二七―二二 路二四・二五―二 太二三・七を見よ 五 哥前一・二七―二〇  
 ナ太一〇・四、二六・ 一七―一九 可一 才路三二・二一―二三 七、四六、四七 徒 フ太二六・六四、二七 エ太一四・一九を見よ  
 二五、四七、二七・ 四・二二―二六 路 約三三・二一―三〇 一七・二、三、二六・ 二一 路三二・七〇 テ（來九・二〇）

二三 女の我が體に香油を注ぎしは、わが葬りの備をなせるなり。二三 誠に汝らに告ぐ、全世界、何處にてもこの福音の  
 宣傳へらるる處には、この女のなしし事も、記念として語らるべし』

一四 ここに十二弟子の一人イスカリオテのユダといふ者、祭司長らの許にゆきて言ふ、一五 なんぢらに彼を付さ

一六 ば、何ほど我に與へんとするか』彼ら銀三十を量り出せり。一六 ユダこの時よりイエスを付さんと好き機を窺ふ。

一七 除酵祭の初の日、弟子たちイエスに來りて言ふ『過越の食をなし給ふために何處に我らが備ふる事を望み

給ふか』一八 イエス言ひたまふ『都にゆき、某のもとに到りて『師いふ、わが時近づけり。われ弟子たちと共に過

越を汝の家にて守らん』と言へ』一九 弟子たちイエスの命じ給ひし如くして、過越の備をなせり。二〇 日暮れて十二

弟子とともに席に就きて、二一 食するとき言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、汝らの中の一人、われを賣らん』二三 弟

子たち甚く憂ひて、おのおの『主よ、我なるか』と言ひいでしに、二三 答へて言ひたまふ『我とともに手を鉢に入

るる者われを賣らん。二四 人の子は己に就きて録されたる如く逝くなり。されど人の子を賣る者は禍害なるかな、

二五 その人は生れざりし方よかりしものを』二五 イエスを賣るユダ答へて言ふ『ラビ、我なるか』イエス言ひ給ふ『な

んぢの言へる如し』二六 彼ら食しをる時イエス、パンをとり、祝してさき、弟子たちに與へて言ひ給ふ『取りて食

へ、これは我が體なり』二七 また酒杯をとりて謝し、彼らに與へて言ひ給ふ『なんぢら皆この酒杯より飲め。二八 こ

れは契約のわが血なり、多くの人のために罪の赦を得させんとて、流す所のものなり。二九 われ汝らに告ぐ、わが

父の國にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後この葡萄の果より成るものを飲まじ』

三〇 彼ら讚美を歌ひて後オリブ山に出でゆく。

三一 ここにイエス弟子たちに言ひ給ふ『今宵なんぢら皆われに就きて躓かん』われ牧羊者を打たん、さらば群

三二 の羊散るべし』と録されたるなり。三三 されど我よみがへりて後、なんぢらに先立ちてガリラヤに往かん』三四 ペテ

三四 口答へて言ふ『假令みな汝に就きて躓くとも我はいつまでも躓かじ』三五 イエス言ひ給ふ『まことに汝に告ぐ、

三五 今宵、鷄鳴く前に、なんぢ三たび我を否むべし』三六 ペテロ言ふ『我なんぢと共に死ぬべき事ありとも汝を否ま

ず』弟子たち皆かく言へり。

三六 爰にイエス彼らと共にゲツセマネといふ處にいたりて、弟子たちに言ひ給ふ『わが彼處にゆきて祈る間、

三七 なんぢら此處に坐せよ』三八 斯てペテロとゼベダイの子二人とを伴ひゆき、憂ひ悲しみ出でて言ひ給ふ、三九 『わが

三九 心いたく憂ひて死ぬばかりなり。汝ら此處に止まりて我と共に目を覺しをれ』四〇 少し進みゆきて、平伏し祈りて

四〇 言ひ給ふ『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にとにはあらず、御意

四一 のままに爲し給へ』四二 弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てペテロに言ひ給ふ『なんぢら斯く一時も我と共に

四二 目を覺し居ること能はぬか。四三 誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ。實に心は熱すれども肉體よわきなり』

四三 また二度ゆき祈りて言ひ給ふ『わが父よ、この酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給

四四 へ』四四 復きたりて彼らの眠れるを見たまふ、是の目疲れたるなり。四四 また離れゆきて三たび同じ言にて祈り給

イ 賽二五・六 約一六 二三三・一三四 ト 太二八・七、一〇、一 一二二 三三六・四六 可一 七 太二七・一 可五・三

七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七

七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七

七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七

七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七

七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七

七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七 七・二七

ノ可一四・四一 約一 約一八・三一 一 二・可一四・四七 路二 二・五〇 約一八・  
二・二七、一三・一 ク太二六・二四を見よ 二・五〇 約一八・  
オ四七・五六 可一 ヤ太二三・七を見よ 一〇 一〇 九・六 黙一三・  
四・四三・五〇 路 マ太二〇・一三、二三 フ路二二・三八 一〇 一〇 九・六 黙一三・  
二二・四七・五三 二二 二 一〇 一〇 九・六 黙一三・ 七、二〇・一、二二  
ア(太四・一一) 三三、約七・二四、  
サ太二六・二四を見よ 二八、八・二二、  
キ可一二・三五、一四 一八・二〇、  
四九 路一九・四 五七、六八 可一 九一、二二、  
約 四・五三、六五 約 一 九一、二二、  
エ太五・二五 約七・三 一八・二二、  
シ太二六・三を見よ 二、三、  
ヒ太五・二二を見よ 五、二二、  
モ申一九・一五 徒

四四 而して弟子たちの許に來りて言ひ給ふ「今は眠りて休め。視よ、時近づけり、人の子は罪人らの手に付さ  
四六 るるなり。四六 起きよ、我ら往くべし。視よ、我を賣るもの近づけり」  
四七 なほ語り給ふほどに、視よ、十二弟子の一人なるユダ來る、祭司長・民の長老らより遣されたる大なる群  
四八 衆、劍と棒とをもちて之に伴ふ。四八 イエスを賣るもの預じめ合圖を示して言ふ「わが接吻する者はそれなり、之  
五〇 を捕へよ」四九 かくて直ちにイエスに近づき「ラビ、安かれ」といひて接吻したれば、五〇 イエス言ひたまふ「友よ  
五一 何とて來る」このとき人々すすみてイエスに手をかけて捕ふ。五一 視よ、イエスと偕にありし者のひとり手をの  
五二 べ、劍を抜きて、大祭司の僕をうちて、その耳を切り落せり。五二 ここにイエス彼に言ひ給ふ「なんぢの劍をもと  
五三 に收めよ、すべて劍をとる者は劍にて亡ぶるなり。五三 我わが父に請ひて十二軍に餘る御使を今あたへらるること  
五四 能はずと思ふか。五四 もし然せば斯くあるべく録したる聖書はいかで成就すべき」五五 この時イエス群衆に言ひ給ふ  
「なんぢら強盜に向ふごとく劍と棒とをもち、我を捕へんとて出で來るか。我は日々宮に坐して教へたりしに、  
五五 汝ら我を捕へざりき。五六 されど斯の如くなるは、みな預言者たちの書の成就せん爲なり」爰に弟子たち皆イエス  
五七 を棄てて逃げさりぬ。  
五七 イエスを捕へたる者ども、學者・長老らの集り居る大祭司カヤパの許に曳きゆく。五八 ペテロ遠く離れイエ  
五九 スに従ひて大祭司の中庭まで到り、その成行を見んとて、そこに入り下役どもと共に坐せり。五九 祭司長らと全議  
六〇 會と、イエスを死に定めんとて、偽りの證據を求めたるに、六〇 多くの偽證者いでたれども得ず。後に二人の者い

二六 六二 大祭司たちてイエスに言ふ「この  
 六三 人で言ふ、六二この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建て得べし」と云へり」  
 六四 大祭司いふ「われ汝に命  
 六五 ず、活ける神に誓ひて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか」  
 六六 イエス言ひ給ふ「なんぢの言へる如し、  
 六七 かつ我なんぢらに告ぐ、今より後、なんぢら人の子の、全能者の右に坐し、  
 六八 天の雲に乗りて來るを見ん」  
 六九 ここに彼等その御顔に唾し拳にて搏ち、或る者どもは  
 七〇 大祭司おのが衣を裂きて言ふ「かれ瀆言をいへり、何ぞ他に證人を求めん・  
 七一 視よ、なんぢら今この瀆言をきけ  
 七二 り・六六いかに思ふか」答へて言ふ「かれは死に當れり」  
 七三 ここに彼等その御顔に唾し拳にて搏ち、或る者どもは  
 七四 手掌にて批きて言ふ、六八「キリストよ、我らに預言せよ、汝をうちし者は誰なるか」  
 七五 六九ペテロ外にて中庭に坐しゐたるに、一人の婢女きたりて言ふ「なんぢも、  
 七六 ガリラヤ人イエスと偕にゐた  
 七七 り」  
 七八 七〇かれ凡ての人の前に肯はずして言ふ「われは汝の言ふことを知らず」  
 七九 七二かくて門まで出で往きたるとき他  
 八〇 の婢女かれを見て、其處にをる者どもに向ひて「この人はナザレ人イエスと偕にゐたり」  
 八一 七三と言へるに、七二重ねて  
 八二 肯はず契ひて「我はその人を知らず」といふ。七三暫くして其處に立つ者ども  
 八三 近づきてペテロに言ふ「なんぢも慥  
 八四 にかの黨與なり、汝の國訛なんぢを表せり」  
 八五 七四爰にペテロ盟ひ、かつ契ひて「我その人を知らず」と言ひ出づる  
 八六 七五をりしも、鶏鳴きぬ。七五ペテロ「にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん」  
 八七 七六とイエスの言ひ給ひし御言を思  
 八八 ひ出し、外に出でて甚く泣けり。

第二十七章 一 夜明になりて凡ての祭司長・民の長老ら、イエスを殺さんと相議り、  
 二 遂に之を縛り、曳きゆき

イ太二七・四〇 可一 八六三・一六六(路三二二) 九・七  
 四・五八、一五・二 六・七(七二) 七・二 九・七  
 九 約二・一九一 二 利五・一 六三 徒一四・一四 八・二二  
 一(徒六・一四) ホ太一六・一六を見よ 六三 徒一四・一四 八・二二  
 口太二七・一二を見よ へ太四・三を見よ 又利二四・一六 約一 七太二七・三〇 可一  
 ト太二六・二五を見よ 九・七  
 チ太一六・二七を見よ 六三 徒一四・一四 八・二二  
 リ民一四・六 可一四 六三 徒一四・一四 八・二二  
 ル六七・六八(路三二二) 九・七  
 ヲ可一四・六五 路二 二・二六  
 二・二六 八・二五(二七) 二六  
 カ六九・七五 可一 三・三三  
 四・六六(七二) 路二 三・三三  
 二二・五五(一六二) 二・五九(約一八・二六) 六六 約一八・二八  
 約一八・一六一 二六  
 八・二五(二七) 二六  
 レ太二六・三四 約一  
 三・三三 三・三三  
 ヨ太二六・三を見よ 三・三三  
 タ可一四・七〇 路二 三・三三  
 ソ可一五・一 路三二

ッ路三・一、一三・一、ナ太二六・一四を見よ 井(徒一・二八) 二、三 約一八・二  
 二二・二 徒三・一 ラ太二六・一五 ノ(徒一・二九) 九一三八  
 三、四・二七 提前 ム太二七・二四 オ西二・二二、一三 ヤ太二・二を見よ  
 六・一三 ウ路一・九、二、二二 ク一・一四 可一 マ太二六・二五を見よ  
 九・九(路二三・九) 九・九(路二三・九) 一八・三九、一九、一  
 六・一三(一) 五・二一五 路二三 ケ摩五三・七 太二六 コ一五・二六 可一 エ太一・一六を見よ  
 一七  
 一六三、二七・一四 五・六一一五 路二 テ約一・四七、四八 ザ(創二〇・六、三一、  
 可一四・六一 約一 三・二八、二五 約 ア約一九・二三 徒一 一一 民一二・六  
 一八・三九、一九、一 八・二二、一六、一 伯三三・一五 太一  
 一六 七、二五、六、一〇、 二〇、二・二二、一  
 一七 三、一九、二二)

て總督ピラトに付せり。

三 爰にイエスを賣りしユダ、その死に定められ給ひしを見て悔い、祭司長・長老らに、かの三十の銀をかへして言ふ、四「われ罪なきの血を賣りて罪を犯したり」彼らいふ「われら何ぞ干らん、汝みづから當るべし」五彼の銀を聖所に投げすてて去り、ゆきて自ら縊れたり。六祭司長ら、その銀をとりて言ふ「これは血の價なれば宮の庫に納むるは可からず」七斯て相議り、その銀をもて陶工の畑を買ひ、旅人らの墓地とせり。八之によりて其の畑は、今に至るまで血の畑と稱へらる。九ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言は成就したり。曰く「かくて彼ら値積られしもの、即ちイスラエルの子らが値積りし者の價の銀三十をとりて、一〇陶工の畑の代に之を與へたり。主の我に命じ給ひし如し」

二 二さてイエス、總督の前に立ち給ひしに、總督、問ひて言ふ「なんぢはユダヤ人の王なるか」イエス言ひ給ふ「なんぢの言ふが如し」三祭司長・長老ら訴ふれども、何を答へ給はず。四爰にピラト彼にいふ「聞かぬか、彼らが汝に對して如何におほくの證據を立つるを」五されど總督の甚く怪しむまで、一言をも答へ給はず。六祭の時には總督、群衆の望にまかせて、囚人一人を之に赦す例あり。七爰にバラバといふ隠れなき囚人あり。七されば人々の集れる時、ピラト言ふ「なんぢら我が誰を赦さんことを願ふか。バラバなるか、キリストと稱ふるイエスなるか」八これピラト彼らのイエスを付ししは嫉に因ると知る故なり。九彼なほ審判の座にをる時、その妻、人を遣して言はしむ「かの義人に係ることを爲な、我けふ夢の中にて彼の故にさまざま苦しめり」一〇祭司

二 長老・長老ら、群衆にバラバの赦されん事を請はしめ、イエスを亡さんことを勧む。三 總督こたへて彼らに言ふ

三 『二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか』彼ら曰ふ『バラバなり』三三 ピラト言ふ『さらばキリストと稱ふるイ

三三 エスを我いかに爲べきか』皆いふ『十字架につくべし』三三 ピラト言ふ『かれ何の悪事をなしたるか』彼ら烈しく

三四 叫びていふ『十字架につくべし』三四 ピラトは何の効なく反つて亂にならんとするを見て、水を取り群衆のまへに

三五 手を洗ひて言ふ『この人の血につきて我は罪なし、汝等みづから當れ』三五 民みな答へて言ふ『その血は、我らと

三六 我らの子孫とに歸すべし』三六 爰にピラト、バラバを彼らに赦し、イエスを鞭ちて十字架につくる爲に付せり。

三七 ここに總督の兵卒ども、イエスを官邸につれゆき、全隊を御許に集め、三八 その衣をはぎて、緋色の上衣を

三九 きせ、三九 茨の冠冕を編みて、その首に冠らせ、葦を右の手にもたせ且その前に跪つき、嘲弄して言ふ『ユダヤ人

四〇 の王、安かれ』四〇 また之に唾し、かの葦をとりて其の首を叩く。三一 かく嘲弄してのち、上衣を剝ぎて、故の衣を

四一 きせ、十字架につけんとて曳きゆく。

四二 その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしかば、強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。三三 斯てゴル

四三 ゴタといふ處、即ち髑髏の地にいたり、四三 苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗めて、飲まんとし給

四四 はず。四五 彼らイエスを十字架につけてのち、籤をひきて其の衣をわかち、三六 且そこに坐して、イエスを守る。

四五 その首の上に『これはユダヤ人の王イエスなり』と記したる罪標を置きたり。三八 爰にイエスとともに二人の強

四六

四七

イ徒三・一四 ト可一五・一五 約一  
口太一・一六を見よ 九・一 彼前二・二四 又徒一〇・一を見よ 三三  
ハ太二六・五 (路二三・一六) ル約一九・二  
ニ申二一・六一八 チ二七・三一 可一五 ヲ約一九・二  
ホ太二七・四 二六・二〇 ヲ約一九・三  
ヘ(書二・一九 徒五・ 一約一八・二八) 三三、 カ太二六・六七 可一  
二八) 一九・九 (太二六、 〇・三四、 一四・六 一  
五 五三二 可一五・二二 路二三・二六(約一 九・二七)  
レ三三・四四 可一 五・二二 一三二 路 五・二二 一三二 路 五・二二 一三二 路  
五・二二 一三二 路 五・二二 一三二 路 五・二二 一三二 路 五・二二 一三二 路  
ナ(可一五・二六 路二 三・三八 約一九・一 九)

路二二・三七  
 路二二・三八  
 路二二・三九  
 路二二・四〇  
 路二二・四一  
 路二二・四二  
 路二二・四三  
 路二二・四四  
 路二二・四五  
 路二二・四六  
 路二二・四七  
 路二二・四八  
 路二二・四九  
 路二二・五〇  
 路二二・五一  
 路二二・五二  
 路二二・五三  
 路二二・五四  
 路二二・五五  
 路二二・五六  
 路二二・五七  
 路二二・五八  
 路二二・五九  
 路二二・六〇  
 路二二・六一  
 路二二・六二  
 路二二・六三  
 路二二・六四  
 路二二・六五  
 路二二・六六  
 路二二・六七  
 路二二・六八  
 路二二・六九  
 路二二・七〇  
 路二二・七一  
 路二二・七二  
 路二二・七三  
 路二二・七四  
 路二二・七五  
 路二二・七六  
 路二二・七七  
 路二二・七八  
 路二二・七九  
 路二二・八〇  
 路二二・八一  
 路二二・八二  
 路二二・八三  
 路二二・八四  
 路二二・八五  
 路二二・八六  
 路二二・八七  
 路二二・八八  
 路二二・八九  
 路二二・九〇  
 路二二・九一  
 路二二・九二  
 路二二・九三  
 路二二・九四  
 路二二・九五  
 路二二・九六  
 路二二・九七  
 路二二・九八  
 路二二・九九  
 路二二・一〇〇

三九 盜、十字架につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。三九 往來の者どもイエスを譏り、首を振りてい  
 四〇 〇宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救へ、十字架より下りよ』四一 祭司長らも、ま  
 四二 た同じく學者・長老らとともに、嘲弄して言ふ、四三 人を救ひて己を救ふこと能はず。彼はイスラエルの王なり、  
 四三 いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん。四四 彼は神に依り頼めり、神かれを愛しまば今すぐひ給ふべ  
 四四 し「我は神の子なり」と云へり』四四 ともに十字架につけられたる強盜どもも、同じ事をもてイエスを罵れり。  
 四五 畫の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。四六 三時ごろイエス大聲に叫びて「エリ、エリ、  
 四七 レマ、サバクタニ」と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意なり。四七 そくに立つ者のうち  
 四八 或る人々これを聞きて「彼はエリヤを呼ぶなり」と言ふ。四八 直ちにその中の一人はしりゆきて海綿をとり、酸き  
 四九 葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。四九 その他の者ども言ふ「まで、エリヤ來りて彼を救ふや否や、  
 五〇 我ら之を見ん』五〇 イエス再び大聲に呼はりて息絶えたまふ。五一 視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとな  
 五三 り、また地震ひ、磐さけ、五三 墓ひらけて、眠りたる聖徒の屍體おほく活きかへり、五三 イエスの復活のち墓を  
 五四 いで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。五四 百卒長および之と共にイエスを守りゐたる者ども、地震とそ  
 五五 の有りし事とを見て、甚く懼れ「實に彼は神の子なりき」と言へり。五五 その處にて遙に望みゐたる多くの女あ  
 五六 り、イエスに事へてガリラヤより従ひ來りし者どもなり。五六 その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフと  
 の母マリヤ及びゼベダイの子らの母などもゐたり。

五七 日暮れて、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、五八 ピラトに往きてイエスの屍體を請ふ。ここにピラト之を付すことを命ず。五九 ヨセフ屍體をとりて淨き亞麻布につつま、六〇 岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を轉ばしおきて去りぬ。六一 其處にはマグダラのマリヤと他のマリヤと墓に向ひて坐しむたり。

六二 あくる日、即ち準備日の翌日、祭司長らとパリサイ人らとピラトの許に集りて言ふ、六三 主よ、かの惑すもの生き居りし時「われ三日の後に甦へらん」と言ひしを、我ら思ひいだせり。六四 されば命じて三日に至るまで墓を固めしめ給へ、恐らくはその弟子ら來りて之を盗み「彼は死人の中より甦へり」と民に言はん。然らば後の惑は前のよりも甚だしからん』六五 ピラト言ふ「なんぢらに番兵あり、往きて力限り固めよ』六六 乃ち彼らゆきて石に封印し、番兵を置きて墓を固めたり。

### 第二十八章

一 さて安息日をはりて一週の初の日のほの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて來りしに、二 視よ、大なる地震あり、これ主の使、天より降り來りて、かの石を轉ばし退け、その上に坐したるなり。三 その狀は電光のごとく輝き、その衣は雪のごとく白し。四 守の者ども彼を懼れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。五 御使、こたへて女たちに言ふ「なんぢら懼るな、我なんぢらが十字架につけられ給ひしイエスを尋ぬるを知る。六 此處には在さず、その言へる如く甦へり給へり。來りてその置かれ給ひし處を見よ。七 かつ速かに往きて、その弟子たちに「彼は死人の中より甦へり給へり。視よ、汝らに先だちてガリラヤに

イ五七—六一 可一 八太二七・六六、二八 へ可一五・四二 路二 二二  
 五・四二—四七 路 二二 可一六・四 三・五四約一九・一 一八 可一六・一  
 二二・五〇—五六 二太二七・五六を見よ 四・三一、四二 一八 路二四・一一 一八 可一六・五 路二 三但七・九、可九・三  
 約一九・三八—四二 二太二七・五六、二八 一〇(約二〇・一一 四・四 約二〇・一 約二〇・一二 徒一 六三(太二二・四  
 口察五三九 二 二 八) 二二) 一〇(路二四・五) 〇)



ナ太一四・二七を見よ ウ太二七・六五を見よ 一三、一四 羅一四 七を見よ  
 ラ約二〇・一七(羅八) 申太二七・二二 九 弗一・二〇—二二 ヤ可一六・一五、一六  
 二九來二・二一、一 ノ太二六・三二を見よ 二 腓二・九—一 瑪路二四・四七(太二  
 二・二七) 才可一六・一一を見よ 西二・二〇 彼前三 五・三三—  
 ム太二六・三二を見よ ク太二六・六四(但七) 二二二 太二・二二 ケ徒一四・二一  
 フ徒一・五、二・三八、コ太一三・三九を見よ  
 八・一六 羅六・三、エ太一・二三、一八・  
 四 哥前二・二三、一 二〇約二・二六、  
 五—一七 加三・二 一四・三、一七・二  
 七 彼前三・二二 四 徒一八・一〇

八 往き給ふ、彼處にて謁ゆるを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり」八 女たち懼と大なる歡喜とをもて、

九 速かに墓を去り、弟子たちに知らせんとて走りゆく。九 視よ、イエス彼らに遇ひて「安かれ」と言ひ給ひたれ

一〇 ば、進みゆき、御足を抱きて拜す。一〇 爰にイエス言ひたまふ「懼るな、往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆ

き、彼處にて我を見るべきことを知らせよ」

二 女たちの往きたるとき、視よ、番兵のうちの數人、都にいたり、凡て有りし事どもを祭司長らに告ぐ。

三 祭司長ら、長老らと共に集りて相議り、兵卒どもに多くの銀を與へて言ふ、「言なんぢら言へ」その弟子ら夜き

たりて、我らの眠れる間に彼を盜めり」と。一四 この事もし總督に聞えなば、我ら彼を宥めて汝らに憂なからしめ

一五 ん」一五 彼ら銀をとりて言ひ含められたる如く爲たれば、此の話ユダヤ人の中にひろまりて、今日に至れり。

一六 十一弟子たちガリラヤに往きて、イエスの命じ給ひし山にのぼり、一七 遂に謁えて拜せり。然れど疑ふ者も

一八 ありき。一八 イエス進みきたり、彼らに語りて言ひたまふ「我は天にても地にても一切の權を與へられたり。一九 然

れば汝ら往きて、もろもろの國人を弟子となし、父と子と聖靈との名によりてバプテスマを施し、二〇 わが汝らに

命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」

マタイ傳・福音書 をはり

- 二・二 或は「その星の上れるを見たれば」と譯す。
- 二・六 或は「町」と譯す。
- 二・九 或は「その上れるを見たる星」と譯す。
- 六・九 或は「聖とせられん事を」と譯す。
- 六・一三 或は「悪しき者」と譯す。  
異本一三の末に「國と威力と榮光とは、ここしへに汝のものなればなり、アマメン」と云ふ句あり。
- 六・二七 或は「その生命を寸陰も延べ得んや」と譯す。
- 六・二八 或は「野の花」と譯す。
- 七・三 或は「木屑」と譯す。四、五節なるも同じ。
- 九・一四 異本「しばしば斷食するに」とあり。
- 九・三六 或は「散る」と譯す。
- 一一・一九 異本「子」とあり。
- 一二・二〇 或は「燈心」と譯す。
- 一三・九 異本「聽く耳」とあり。
- 
- 一三・四三 異本「聽く耳」とあり。
- 一四・二四 異本「海の真中に在り」と譯す。
- 一六・七 或は「これはパンを携へざりし故ならん」と譯す。
- 一六・八 或は「パンなき故ならん」と語り合ふか」と譯す。
- 一六・一八 ベテロとは「磐」の義なり。
- 一六・一九 或は「禁する所は天にても禁じ、地にて許す所は天にても許さん」と譯す。
- 一六・二二 原語「汝に憐みあれ」との義なり。
- 一七・二二 異本「この類は祈と斷食とに由らざれば出でぬなり」とあり。
- 一七・二七 原語「スタテール」
- 一八・一一 異本「それ人の子の來れるは失せたる者を救はん爲なり」との句あり。
- 一八・一八 或は「禁する所は天にても禁じ、地にて許す所は天にても許すなり」と譯す。
- 
- 一九・九 異本に五章三二と同一の句あり。
- 二一・九 「救あれ」との義なり。
- 二三・一四 異本にマルコ傳十二章一四ルカ傳二十章四七とはば同じ句あり。
- 二三・一五 譯して「地獄の子」とす。
- 二四・二八 或は「元鷹」と譯す。
- 二四・三三 或は「時」と譯す。
- 二四・三六 異本「子も知らず」の句なし。
- 二四・五一 或は「挽き斬り」と譯す。
- 二六・一五 或は「銀三十と定めたり」と譯す。
- 二六・五〇 或は「なんぢの成さんきて來れることを成せ」と譯す。
- 二六・六一 或は「聖所」と譯す。
- 二七・九 或は「われ」と譯す。
- 二七・一三 或は「重大なる」と譯す。
- 二七・四〇 或は「聖所」と譯す。
- 二七・六五 或は「汝ら番兵を用ひよ」と譯す。